

南島原市文化財調査報告書 第2集

三本松遺跡 木場製鉄遺跡

— 布津東部地区県営畑地帯総合整備事業に伴う調査 —

2010

長崎県南島原市教育委員会



三本松遺跡上空より雲仙普賢岳を望む
(写真中央を横切る森は布津断層)

発刊にあたって

この度、平成19年度に発掘調査を実施した三本松遺跡および木場製鉄遺跡の文化財発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

発掘調査は、県営畠地帯総合整備事業に伴うものでしたが、遺跡の大部分については盛土の調整などによって可能な限りの保護措置を図り、必要最低限の区域で実施したものです。関係者の皆様方の御理解に対しまして、改めて深く感謝を申し上げます。

三本松遺跡の調査に於きましては、縄文時代早期、縄文時代晚期、弥生時代中期から後期の土器や石器などの貴重な資料を得ることができました。

木場製鉄遺跡の調査では、17世紀後半から18世紀頃の製鉄に関連する廃滓場の跡を確認いたしました。従来、製鉄が行われていたと指摘される地域でしたが、大量の鉄滓廃棄と一緒に輪の羽口や陶磁器類も出土するなど其の一端を垣間見ることが出来ました。成果の一つと考えております。

何れも、遺跡内の限られた一部分の調査でしたので、遺跡の全体像を把握するには至っておりませんが、本書が少しでも研究のお役に立てば、これに勝る幸せは御座居ません。

結びになりますが、調査を実施するに際しまして、深い御理解と温かな御協力を賜りました関係者の皆様方ならびに発掘調査と整理作業に従事して頂いた方々に、心から厚く御礼を申し上げます。

本書の発刊は、偏に皆様方の御支援の賜であります。

皆様の益々のご健勝とご発展をお祈り申し上げ、発刊のご挨拶とさせて頂きます。

平成22年3月26日

南島原市教育委員会 教育長 菅 弘 賢

卷頭圖版 2



三本松遺跡出土遺物（石器）



三本松遺跡出土遺物（土器）



木場製鉄遺跡 調査区全景



木場製鉄遺跡 鉄滓廢棄土坑

巻頭図版 4



木場製鉄遺跡出土遺物 蔴の羽口・鉄滓



木場製鉄遺跡出土遺物 土器・陶磁器

例　　言

1. 本報告書は、布津東部地区県當畠地帯総合整備事業に伴い、平成19年度に実施した三本松遺跡および木場製鉄遺跡の緊急発掘調査の報告書である。

2. 調査は南島原市教育委員会が担当した。

発掘調査は下記の期間に実施した。

平成19年7月17日～平成19年9月12日（三本松遺跡・範囲確認調査）

平成19年10月4日～平成19年11月9日（三本松遺跡・本調査）

平成19年11月13日～平成19年11月17日（木場製鉄遺跡・本調査）

3. 調査体制は次のとおりである。

調査主体　南島原市教育委員会　教育長　菅　弘賢

　同　教育次長　井口　敬次

　同　文化財課長　但馬　健剛

調査担当　同　文化財課主事　伊藤　健司（現主査）

4. 三本松遺跡本調査における遺構等の測量及び空中写真撮影業務は御埋蔵文化財サポートシステムに委託した。その他の各調査に係る測量、写真撮影は発掘作業員の協力を得て伊藤が行った。

5. 整理作業は南島原市旧深江町給食センターで行い、関係者と作業分担は次のとおりである。

出土遺物の洗浄、注記は本多瑠美、吉川美智子、小林さおりが行い、遺物の接合は吉川、小林が行った。実測図作成は吉川、小林、本多和典（文化財課主事）、伊藤が行い、拓本は吉川、小林、伊藤が行った。トレースは内山貴有（文化財調査員）、伊藤が行った。出土遺物の写真撮影は伊藤が行った。

6. 本調査報告書に係る記録写真、図面等は南島原市旧深江町給食センターに保管している。また出土遺物についても、同所に保管している。

7. 調査に用いた方位は真北である。

8. 本書の執筆および編集は伊藤による。

目 次

発刊にあたって

巻頭図版

例 言

本文 目 次

第1章 三本松遺跡および木場製鉄遺跡の地理的・歴史的環境	1
第2章 三本松遺跡の調査	7
第1節 調査に至る経緯	7
第2節 範囲確認調査	7
1. 調査の概要	7
2. 基本土層	8
3. 範囲確認調査の出土遺物	9
第3節 本調査	13
1. 調査の概要	13
2. 層位	13
3. 遺構	16
4. 遺物	22
第3章 木場製鉄遺跡の調査	34
第1節 調査に至る経緯	34
第2節 調査	34
1. 調査の概要	34
2. 土層および遺構	34
3. 遺物	37
第4章 調査のまとめ	43
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 三本松遺跡および木場製鉄遺跡の位置	2
第2図 周辺遺跡および市内主要遺跡分布図	4
第3図 三本松遺跡試掘坑配置図	8
第4図 基本土層概念図（範囲確認調査）	8
第5図 範囲確認調査の出土遺物①	10
第6図 範囲確認調査の出土遺物②	11

第7図	基本土層対応図	13
第8図	三本松遺跡 調査地周辺図	14
第9図	三本松遺跡 調査区配置図	15
第10図	三本松遺跡 1区南壁土層図	17
第11図	三本松遺跡 2区北壁土層図	18
第12図	三本松遺跡 2区東壁土層図	19
第13図	三本松遺跡 1区遺構平面図	20
第14図	三本松遺跡 2区遺構平面図	21
第15図	三本松遺跡出土遺物・石器①	23
第16図	三本松遺跡出土遺物・石器②	24
第17図	三本松遺跡出土遺物・土器類①	25
第18図	三本松遺跡出土遺物・土器類②	26
第19図	三本松遺跡出土遺物・土器類③	28
第20図	三本松遺跡出土遺物・土器類④	29
第21図	三本松遺跡出土遺物・土器類⑤	30
第22図	木場製鉄遺跡 調査地周辺図	35
第23図	木場製鉄遺跡 調査区平面図および土層図	36
第24図	鉄滓廐棄土坑縦断図	37
第25図	木場製鉄遺跡 鉄滓廐棄土坑の出土遺物	38
第26図	木場製鉄遺跡 調査区の出土遺物①(陶器)	38
第27図	木場製鉄遺跡 調査区の出土遺物②(磁器・土器)	40
第28図	木場製鉄遺跡 調査区の出土遺物③(石製品)	40

表 目 次

表1	周辺遺跡および市内主要遺跡一覧表	5
表2	遺物観察表(範囲確認調査・石器類)	12
表3	遺物観察表(範囲確認調査・土器類)	12
表4	三本松遺跡出土遺物観察表(石器類)	32
表5	三本松遺跡出土遺物観察表(土器類)①	32
表6	三本松遺跡出土遺物観察表(土器類)②	33
表7	木場製鉄遺跡出土遺物観察表(陶磁器・土器)	42
表8	木場製鉄遺跡出土遺物観察表(石製品)	42

写真図版目次

巻頭図版1 三本松遺跡上空より雲仙普賢岳を望む

巻頭図版2	上：三本松遺跡出土遺物（石器） 下：三本松遺跡出土遺物（土器）
巻頭図版3	上：木場製鉄遺跡 調査区全景 下：木場製鉄遺跡 鉄滓廃棄土坑
巻頭図版4	上：木場製鉄遺跡出土遺物 瓢の羽口・鉄滓 下：木場製鉄遺跡出土遺物 土器・陶磁器
図版1	上：調査前風景（範囲確認調査） 下：土層堆積状況（範囲確認調査） 47
図版2	上：表土剥ぎ取り状況 下：作業風景 48
図版3	遺物出土状況 49
図版4	上：1区完掘状況（北より） 下：2区完掘状況（西より） 50
図版5	上：2区完掘状況（南より） 下：測量作業 51
図版6	上：1区完掘状況（上空より） 下：2区完掘状況（上空より） 52
図版7	上：1区土層堆積状況 下：2区土層堆積状況 53
図版8	範囲確認調査の出土遺物（石器） 54
図版9	範囲確認調査の出土遺物（縄文土器） 55
図版10	範囲確認調査の出土遺物（弥生時代以降の土器類） 56
図版11	三本松遺跡出土遺物 石器① 57
図版12	三本松遺跡出土遺物 石器② 58
図版13	三本松遺跡出土遺物 石器③ 59
図版14	三本松遺跡出土遺物 縄文時代早期の土器 60
図版15	三本松遺跡出土遺物 縄文時代後晩期の土器（深鉢）① 61
図版16	三本松遺跡出土遺物 縄文時代後晩期の土器（深鉢）② 62
図版17	三本松遺跡出土遺物 縄文時代晩期の土器（精製浅鉢） 63
図版18	三本松遺跡出土遺物 縄文時代晩期の土器（粗製浅鉢） 64
図版19	三本松遺跡出土遺物 組織痕土器（拡大）・縄文時代晩期の土器（底部） 65
図版20	三本松遺跡出土遺物 弥生時代の土器①（中期の壺） 66
図版21	三本松遺跡出土遺物 弥生時代の土器②（後期の壺） 67
図版22	三本松遺跡出土遺物 弥生時代の土器③（壺・高杯） 68
図版23	三本松遺跡出土遺物 弥生時代の土器④（脚部・底部） 69
図版24	三本松遺跡出土遺物 古墳時代以降の遺物 70
図版25	上：調査前風景 下：調査区精査による鉄滓分布の確認状況 71
図版26	上：作業風景 下：調査区中央付近の鉄滓堆積状況 72
図版27	上：作業風景 下：調査区完掘状況（北より） 73
図版28	上：鉄滓廃棄土坑（西より） 下：鉄滓廃棄土坑（東より） 74
図版29	木場製鉄遺跡 鉄滓廃棄土坑内の出土遺物 75
図版30	木場製鉄遺跡 調査区の出土遺物①（陶器） 76
図版31	木場製鉄遺跡 調査区の出土遺物②（陶磁器・土器） 77
図版32	木場製鉄遺跡 調査区の出土遺物③（石製品・瓢の羽口） 78

第1章 三本松遺跡および木場製鉄遺跡の 地理的・歴史的環境

今回調査を実施した三本松遺跡と木場製鉄遺跡は、長崎県島原半島東部の南島原市布津町に所在する。いずれの遺跡も雲仙山系の野岳から派生した台地上にある。遺跡の標高は三本松遺跡が約80m、木場製鉄遺跡が約74mである。三本松遺跡のすぐ北側には雲仙地溝の南縁をなす布津断層が北西から東の海岸まで走っている。北側の方が低くなってしまい、遺跡付近での比高差は70m前後である。北方の同市深江町付近は扇状地形をなしているため、遺跡付近からの眺望は優れたものとなっている。

木場製鉄遺跡は三本松遺跡から南西へ600mほどの距離にある。遺跡のすぐ南側には渡瀬川が流れしており、この付近で遺跡の立地する台地はいったん途切れるが、似たような台地は市内の西有家町付近まで連続して展開している。この一帯は、縄文時代や弥生時代を中心とした遺跡の密集する地域となっている。こうした台地上では、市の基幹作物である葉タバコなどの栽培が盛んに行われているが、今回の調査も葉タバコの畠地を主とする農地改良事業に伴って実施したものである。

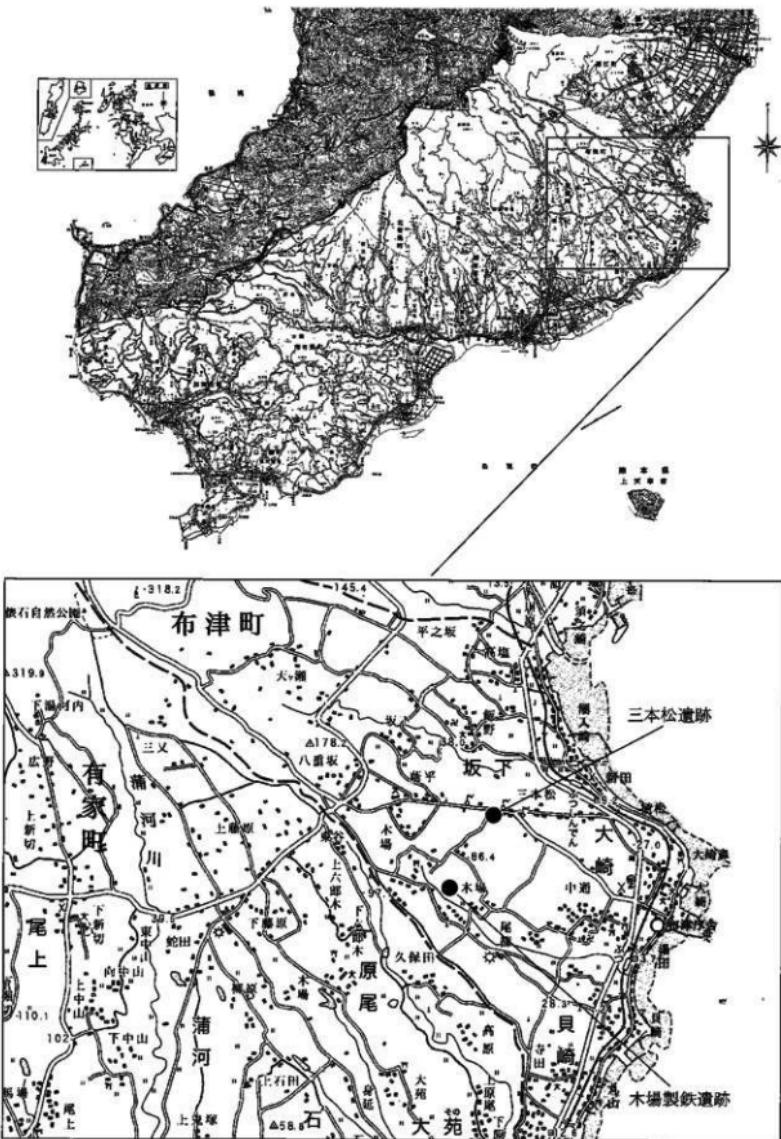
三本松遺跡と木場製鉄遺跡の所在する南島原市内には約180の周知遺跡がある。両遺跡の周辺遺跡や関連遺跡および市内の代表的な遺跡を概観し、歴史的な環境を確認しておきたい。

市内における縄文時代の代表的な遺跡としては、縄文時代から弥生時代への移行期の原山支石墓群や山ノ寺桍木遺跡が挙げられ、全国的にも著名な遺跡である。原山第1遺跡は戦後の開墾時にほぼ消滅しているが、第2支石墓群および第3支石墓群が国史跡に指定されており、国内最大規模の支石墓群となっている。山ノ寺桍木遺跡は、山ノ寺式土器の標識名となった遺跡であり、昭和30年代の調査で、合口壺棺、土製紡錘車、敷石住居跡、石斧などの石器類、組織痕土器、初痕土器などが発見されている。椎現脇遺跡は近年発見され、水無川上流域の砂防事業に伴って調査が実施されている。縄文時代後晩期から弥生時代前期を主とした多くの遺物に加え、遺跡からは火碎流サージなど火山活動の痕跡も発見されるなど、地質学、火山学の分野に対しても貴重な成果を提供している。

調査地の近隣でみると、縄文時代早期の主だった遺跡として下末宝遺跡、上畔津遺跡、大崎鼻遺跡、通野遺跡などが挙げられる。前期から後期頃については調査事例が少なく状況が判然としないが、後期頃になると遺跡が増加する傾向がみられる。弥生時代へ移行する刻目突堤文期の近隣遺跡としては、亀の首遺跡が挙げられる。平成20年度に布津北部地区県営畠地総合整備事業に伴って調査を実施したものであり、包含層資料が中心ながら刻目突堤文期を主とした良好な資料が得られている。これについて、平成22年度に報告を予定している。

弥生時代から古墳時代初頭にかけての代表的な遺跡としては、北有馬町今福遺跡が挙げられる。県道改良事業に伴って調査が実施されたものであり、遺構としては堅穴式住居、ドングリ貯蔵穴、壺棺、環濠の一部などが発見され、主な遺物としては北部九州系および中九州系の搬入土器や、小形鋤製鏡、銅鏡、鉄製品、ガラス製小玉、碧玉製管玉、立岩産石庵丁などが出土している。また、調査担当者の宮崎貴夫氏によって設定された当該期の土器編年は、当地域において大きな指針となっている。

木場原遺跡は、今回報告する2遺跡のはば中間を埋める形で広がっている遺跡であり、周知面積は約8万m²と広大である。弥生時代中期頃の小児用壺棺などが過去に発見されており、壺棺には鋤先状口縁など北部九州の影響を受けたと考えられるものがある。壺棺の発見により墓域としての性格が想



第1図 三本松遺跡および木場製鉄遺跡の位置

定されているが、対応する集落の状況についてはこれまで明らかになっていない。

古墳そのものは市内全域を見渡しても、あまり多くない。遺跡としての登録件数は数件あるが、古墳としての体を留めているのは、同じ布津地区の鬼の岩屋古墳（天ヶ瀬古墳）が現在知る限り唯一である。同古墳は横穴式石室を伴う小規模な円墳であり、古墳時代終末期頃のものと考えられる。墳頂の盛土が流出しているため、石室の天井石が露出し、石室は開口している。

中世の遺跡としては、肥前有馬氏の本城である日野江城跡が代表的である。築城時期については、鎌倉期あるいは南北朝期とする説があり、調査によってこれを検証していく作業が課題としてある。城は有馬川と大手川の下流に挟まれた丘陵先端に築かれており、本丸、二ノ丸、三ノ丸などから構成される。過去の発掘調査では二ノ丸跡において、切石や墓石を用いた独特な階段遺構、金箔瓦などの発見がなされている。また市内には日野江城の支城として築かれた有家城、大垣城などの城跡が点在する。深江城は安富氏築城の城であるが、戦国期において有馬氏と佐賀の竜造寺氏が争いを繰り広げた際、安富氏は竜造寺方についている。天正十二年（1584）の沖田驍の戦いにおいて、竜造寺隆信が敗死したことにより、安富氏は佐賀へ移り深江氏を名乗るようになったと伝えられている。

原城跡は中世から近世にかけての城郭であり、島原天草一揆の主戦場として全国的に著名である。有明海に突き出した崖地形や入江などを巧みに利用して築かれている。城跡全体の詳細については未だ不明な点もあるが、本丸については調査が進んでおり、石垣の築城技術や出土遺物、また文献資料も含め、現在にみる姿が慶長期の所産であることが明らかとなっている。過去の調査においては貿易品を含む夥しい量の陶磁器類、銃弾や砲弾、クルス、ロザリオの珠、メダイといったキリスト教遺物、瓦類などが出土している。また城が破却された状況や、一揆衆とみられる戦死者の人骨も多く発見されている。加えて、城本来の構造物である石垣群や虎口跡が確認され、現在の姿となっている。遺跡登録はされていないが、原城跡周辺には幕府軍の陣屋跡と考えられる旧地形が残っており、これらの調査と保護も課題となっている。日野江城跡と原城跡は、慶長十四年（1609）の岡本大八事件による有馬晴信の失脚、有馬直純の日向転封、松倉重政の日野江城入城、元和元年（1615）の一國一条令の発布といった出来事を経て、いずれも廢城となる。

時期は前後するが、16世紀後半にルイス・デ・アルメイダ修道士が市南部の口之津でカトリックの布教活動を開始したことを契機に、この地域では一時期キリスト文化が根付くこととなる。現存する文化財からそうした状況をみると、キリスト教墓碑がそれを顕著に表しており、無紋無銘のもの等も含めると100基余りの墓碑が市内各所に点在している。地区別でみると有家・西有家付近に特に多く、北有馬や市南西部の加津佐あたりにも多い。これらの地区は、イエズス会の教育機関であるセミナリヨやコレジヨが設置された地域であるので、関連性があるのかも知れない。布津地区でみると、官ノ本共同墓地の一角に「布津町キリスト教墓碑群」があり、正面軸部にカルワリオ十字の描かれた蒲鉾型の墓碑1基を含む、6基の墓碑が県の史跡指定を受けている。

最後に木場製鉄遺跡との関連であるが、「長崎県遺跡地図」より市内の製鉄関連遺跡を拾い上げると、当該遺跡のほかに5遺跡が知られる（第2図および表1 18、21～23、28）。時期は中世のみのもの、或いは中近世のものとして、中世を含む形での登録となっている。木場製鉄遺跡よりは時期的に古めの傾向であるため、単純な括りもできないが、先に述べた縄文時代および弥生時代の遺跡が密集する地域を踏襲する形で、こうした遺跡が広がっている点は興味深い。



第1表 周辺遺跡及び市内主要遺跡一覧表

番号	遺跡名称	所在地	種別	立地	時代	備考
1	椎現島遺跡	深江町大野木場名	遺物包含地	丘陵	縄文	
2	山ノ寺櫛木遺跡	深江町田中名字山寺	遺物包含地	丘陵	縄文	
3	下末宝遺跡	深江町古江名下末宝	遺物包含地	丘陵	縄文	
4	上畦津遺跡	深江町田中名上畦津、西畦津	遺物包含地	台地	縄・弥	
5	深江城跡	深江町馬場名立場場	城跡	台地	中世	
6	井手口キリシタン墓碑	深江町馬場名井手口	キリシタン墓碑	丘陵	中・近	
7	鬼の岩墨古墳(天ヶ瀬古墳)	布津町坂下名天ヶ瀬	古墳	台地	古墳	
8	亀の首遺跡	布津町坂下名亀の首	遺物包含地	丘陵	縄文	
9	飯野遺跡	布津町坂下名飯野	遺物包含地・墳墓	丘陵	縄・弥	
10	三本松遺跡	布津町坂下名三本松	遺物包含地	台地	縄・弥	
11	木場原遺跡	布津町坂下名木場	遺物包含地・墳墓	台地	弥生	
12	木場製鉄遺跡	布津町坂下名木場	製鉄跡	台地	近世	
13	大崎鼻遺跡	布津町大崎名比羅神社付近	遺物包含地	海岸部	縄文	
14	布津町キリシタン墓碑群	布津町乙	キリシタン墓碑	丘陵	中世	県史跡
15	布津城跡	布津町貝崎名城山	城跡	台地	中世	
16	高原遺跡	有家町原尾名高原	遺物包含地	扇状台地	弥・古	
17	通野遺跡	有家町大苑名	遺物包含地	扇状台地	縄・弥	
18	大苑遺跡	有家町大苑名大苑	遺物包含地(製鉄跡)	扇状台地	縄・弥・中・近	
19	堂崎城跡	有家町石田名古城	城跡	扇状台地	中世	
20	堂崎遺跡	有家町石田名	遺物包含地	海底	縄文	
21	鍛冶屋敷遺跡	有家町石田名鍛冶屋敷、上新切、下新切	製鉄跡	扇状台地	中・近	
22	穴ノ元遺跡	有家町尾上名穴ノ元	製鉄跡	台地	中・近	
23	裏谷遺跡	有家町尾上名裏谷	製鉄跡	扇状台地	中・近	
24	有家町尾上のキリシタン墓碑 有家町力野のキリシタン墓碑	有家町尾上名	キリシタン墓碑	扇状台地	近世	県史跡 史跡公園
25	有家町利根川のキリシタン墓碑	有家町中須川名	キリシタン墓碑	平地	近世	県史跡
26	大垣城跡	西有家町慈恩寺名本ノ松	城跡	台地	中世	
27	有家城跡	西有家町里坊名字本丸平	城跡	台地	中世	
28	金クサ原遺跡	西有家町里坊名法恩寺	製鉄跡	台地	中世	
29	吉利支丹墓碑	西有家町須川名松原	キリシタン墓碑	扇状地	近世	国史跡
30	谷川のキリシタン墓碑	北有馬町谷川名字中屋敷	キリシタン墓碑	丘陵	近世	県史跡
31	日野江城跡	北有馬町大字谷川名	城跡	丘陵	中世	国史跡
32	今福遺跡	北有馬町今福名今福	遺物包含地	平地	弥・中	
33	西正寺のキリシタン墓碑	北有馬町西正寺名字服田	キリシタン墓碑	丘陵	近世	県史跡
34	原山支石墓群(第3遺跡)	北有馬町坂上下名字原ノ尻河	墳墓	台地	縄文	国史跡
35	原山支石墓群(第2遺跡)	北有馬町坂上下名字新田	墳墓	台地	縄文	国史跡
36	金比羅神社遺跡	南有馬町北岡名宮の脇茂	墳墓	平地	弥・奈	
37	原城跡	南有馬町	城跡	台地	中・近	国史跡
38	三軒家貝塚	口之津町西大屋名三軒家	貝塚・遺物包含地	丘陵	弥生	
39	南蛮船来航の地	口之津町西大屋名字唐人町	史跡	平地	中世	-
40	口之津朝白浜のキリシタン墓碑	口之津町名白浜	キリシタン墓碑	海浜	近世	県史跡
41	永瀬貝塚	加津佐町水月名永瀬	遺物包含地	丘陵	縄・弥	
42	円通寺跡	加津佐町水月名字天辻	寺跡	台地	中世	
43	加津佐町崩場のキリシタン墓碑	加津佐町水月名字須崎	キリシタン墓碑	沖積地	中世	県史跡
44	加津佐町砂原のキリシタン墓碑	加津佐町野田名字砂原付	キリシタン墓碑	海浜	中世	県史跡
45	辻貝塚	加津佐町野田名辻・東辻・辻田ほか	貝塚	丘陵	弥生	

〈参考文献〉

- 長崎県教育委員会 編 1997 「原始古代の長崎県」資料編Ⅱ
- 高野晋司 編 1981 「国指定史跡原山支石墓群環境整備事業報告書」北有馬町教育委員会
- 土橋啓介 編 2001 「大崎鼻遺跡」布津町文化財調査報告書第1集 布津町教育委員会
- 外山幹夫 1998 「史跡日野江城跡の概要」木村岳士 編『日野江城跡』北有馬町文化財調査報告書第2集 北有馬町教育委員会
- 長崎県教育委員会 編 1994 「長崎県遺跡地図」長崎県文化財調査報告書第111集
- 中村 賢 1996 「原城跡の概要」松本慎二 編『原城跡』南有馬町文化財調査報告書第2集 南有馬町教育委員会
- 本多和典 編 2005 「下末宝遺跡・上畔津遺跡」深江町文化財調査報告書第1集 深江町教育委員会
- 本多和典 編 2006 「椎現路遺跡」深江町文化財調査報告書第2集 深江町教育委員会
- 本多和典 編 2007 「椎現路遺跡」赤松谷川1号床固工工事に伴う発掘調査 南島原市文化財調査報告書第1集 南島原市教育委員会
- 松本慎二 編 2004 「原城跡Ⅱ」南有馬町文化財調査報告書第3集 南有馬町教育委員会
- 宮崎貴夫 編 1985 「今福遺跡Ⅱ」長崎県文化財調査報告書第77集 長崎県教育委員会

第2章 三本松遺跡の調査

第1節 調査に至る経緯

平成19年4月末、長崎県島原振興局農林部土地改良課（現農林水産部農村整備課）および市の関係部局より、布津東部地区県営畠地帯総合整備事業における追加取込地区に周知の三本松遺跡が重複しているようなので、対応について協議したいとの連絡が市教委文化財課にあった。関係者協議を行い、計画内容の聞き取りを行ったところ三本松遺跡の範囲に概ね重複するような形で、当該工区（1-4工区、約11,000m²）が設定されていることが明らかとなった。三本松遺跡については遺跡への到達深度や工事による遺跡への影響がどの程度になるか不明であったので、遺跡範囲確認調査を緊急に実施し、結果を踏まえて再度協議することとなった。

範囲確認調査の概要については次節で述べるが、調査においては主に縄文時代晩期の土器片、弥生時代後期頃の土器片が出土し、石器として磨製石斧などが出土した。遺構としては柱穴などが数基確認された。部分的には耕作や削平等の影響が見られるものの、工事計画区域内において概ね遺跡が残っていることが明らかとなった。こうした結果を受け、再度、島原振興局及び市関係部局と協議を行った。予定されていた工事スケジュールが差し迫っていた事と、遺跡保護の観点から出来うる限り遺跡の現地保存を図る方向で調整を行った。工事設計と遺跡深度の妥合を行い、圃場面については概ね盛土調整により遺跡の現地保存が可能となったが、設計変更が困難な排水路設置区间の一部、及び耕作道延長に伴う現況圃場の切り取り部分、併せて約300m²については遺跡への影響を免れないため、記録保存のための本調査を実施するに至った。

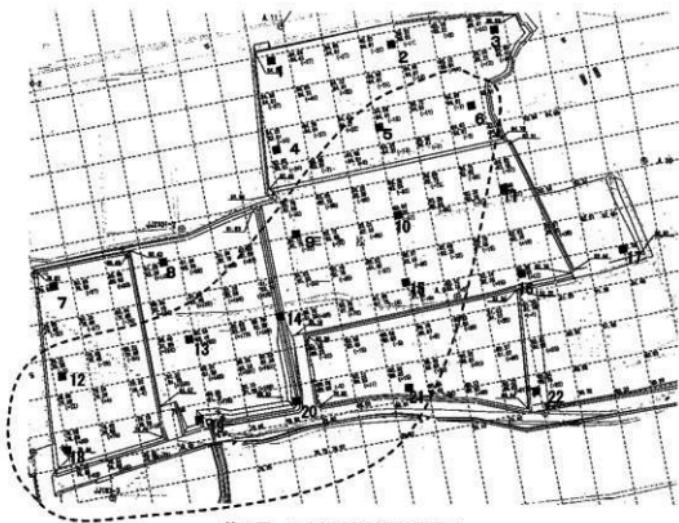
第2節 範囲確認調査

1. 調査の概要

範囲確認調査は平成19年7月17日より同年9月12日までの期間で実施し、関係地区内に2m×2mの調査坑を22箇所設定して遺構および遺物の確認にあたった（第3図）。

調査の結果、遺構や遺物包含層の残存が認められた調査坑はTP-5, 6, 10, 12, 14, 15, 18, 19, 20, 21であり、関係地区的北西側から南側にかけて広がる。

遺構が確認された調査坑はTP-5, 10, 12, 14, 18, 19, 20である。遺構は主にピットであるが、TP-18においては溝状遺構もみられた。範囲確認調査において遺構を確認したのは明褐色の火山灰質土層上面であり、直上にある黒褐色土層が遺物包含層をなしている。本調査が必要となった場合を想定し、明褐色土層以下の状況についても把握する必要があったため、遺構検出面での測量や写真撮影などの記録作業を行い、さらに下層の掘削を行っている。上面が遺構面を形成する明褐色土層は、縄文時代の遺物を僅かに包含しており、さらに下層においては地山とみられる明褐色粘質土層に至るまで遺構や遺物の検出はなかった。



第3図 三本松遺跡試掘坑配置図
(破線は、確認調査により推定された遺跡の残存範囲を概念的に示したもの)

2. 基本土層

範囲確認調査でみられた基本土層は8層からなる。このうちⅢ層の黒褐色土層が主要な遺物包含層をなし、縄文時代および弥生時代の遺物を主として含んでいる。遺構面はⅣ層の上面で形成されており、またⅣ層自体も遺物を僅かに包含している。本調査においてはⅢ層を二分しており、詳しくは後述するが、範囲確認調査のⅣ層が概ね本調査のV層に対応し、以下の層番号が繰り下がる格好となっている。一部のトレンチにおいては現況地形と旧地形の傾斜の関係から、包含層や遺構面をなす明褐色土層が既に削平されており、より下位の層が表土直下において検出される状況もみられた。こうした個所については、本調査の対象範囲から除

I層 表土層（耕作土）
II層 しまりのある褐色土
III層 黒褐色土（遺物包含層）
IV層 火山灰質の明褐色土（遺構面）
V層 しまりのある暗褐色土
VI層 バミスを大量に含む、非常に固い灰褐色土
VII層 灰褐色の非常に固い粘質土
VIII層 明褐色粘質土

第4図 基本土層概念図（範囲確認調査）

外している。また同様の要因で、包含層に対応する黒褐色土層が表土直下に位置する場合もあった。遺物観察表においてⅡ層出土の遺物がみられるのはそのためで、各試掘坑の層番号については基本土層の番号によらず表土層からの序列によって割り振ったことによるものである。

3. 範囲確認調査の出土遺物（第5・6図）

出土遺物は主に縄文時代晚期及び弥生時代後期頃の土器片である。分布状況としては、北西側に縄文時代晚期、南側に弥生時代のものが見られる傾向があったが、漸次的なものであり、明瞭に区分する程のものでは無い。土器以外では縄文時代のものと考えられる石斧などが出土している。以下、範囲確認調査で出土した代表的な遺物について概要を述べる。

石器類

1～4は石器類である。1は打製石斧の未成品である。長方形の素材に粗い成形を加えた痕がみられる。石材は凝灰岩系の岩石で、風化が著しく稜は不明瞭となっている。2は完形の磨製石斧である。頁岩製であり、一部自然面が残るが全体的に丁寧な研磨によって製作されている。刃部形態は両刃であり、正面觀は弧状を呈する。右側縁に平坦面をもち、敲打の痕がみられる。3も頁岩製の磨製石斧であり、製作技法や形態は2と共通しているが、サイズ的に小振りとなるものである。刃部側が残存しており、基部側は欠損している。4は黒曜石の縦長剥片である。二次加工による刃部作出などはみられない。

土器類

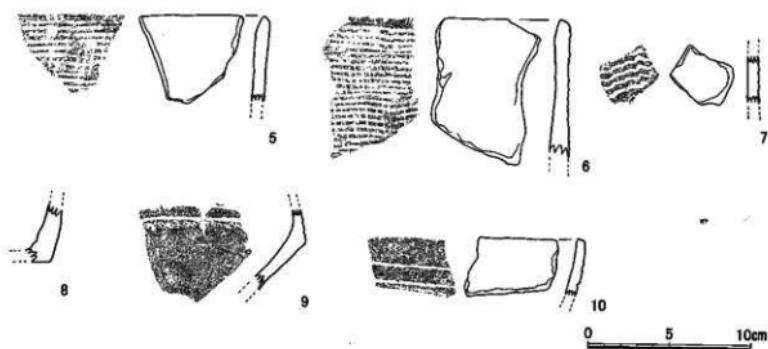
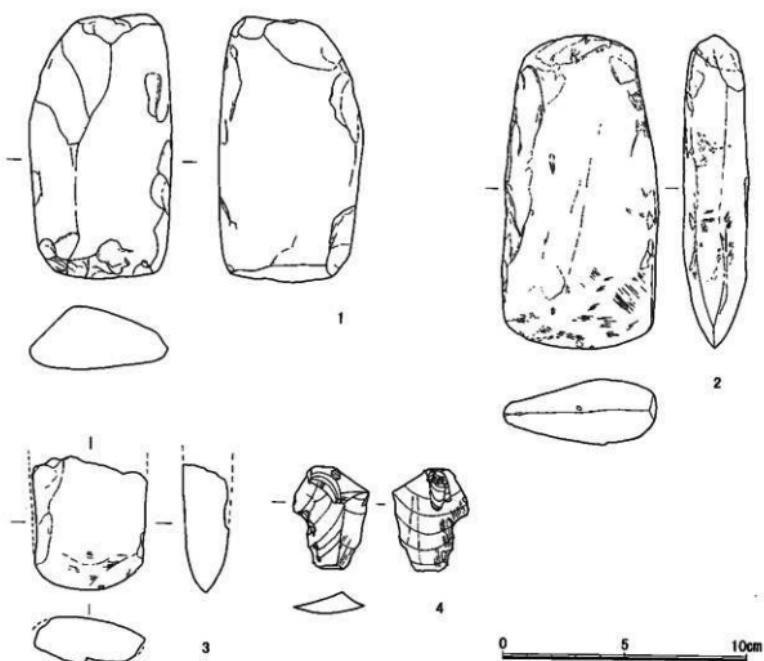
5～8は縄文時代早期前半の円筒条痕系土器で、いずれも深鉢と考えられる。在地の土器型式名によるならば一野式段階に相当する。5・6は口縁部である。直立気味に立ち上がり、端部は丸みをもつ。外面には横位の貝殻条痕を施したのち、さらに縦位の条痕を加えている。7は体部片であり、外面の貝殻条痕は緩やかな波状をなす。8は平底を呈する底部片である。

9は縄文時代後期頃の磨消繩文土器である。波状口縁をなす深鉢と考えられる。外面の屈曲部より上位には沈線が2条残存しており、内部の縄文は磨り消される。

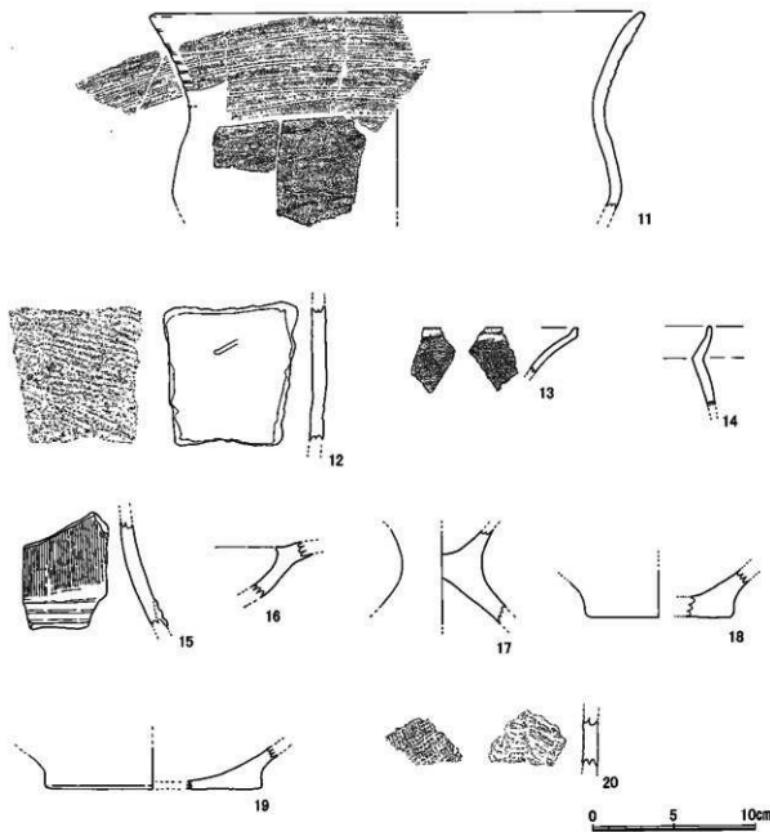
10～13は縄文時代晚期の資料であり、10～12が深鉢、13が浅鉢である。10は幅広の口縁帯を持つものであり、いわゆるタガ状になると考へられる。外面には沈線が2条残る。11は口縁から体部まで残る資料である。復元口径は約30.5cmを測る。口縁は外反気味に軽く開き、口縁から体部にかけての屈曲は緩やかである。肩部はやや強く張る。口縁部の外面には沈線が多重に巡らされる。12は体部片であり、外面には条痕が施される。13は精製浅鉢の口縁部であり、全体に丁寧な研磨が施される。口縁形態は外反気味に大きく開き、端部は上方へ短くつまみ出される。

14～19は弥生土器である。14は「く」字を呈する壺の口縁部である。口縁の立ち上がりは強めで、やや内湾気味となっている。器壁は薄手のつくりとなっている。15は壺の肩部片と考えられるものである。外面の下位に断面三角形の突帯が3条残存している。器体はやや大きめになると考へられる。16は高壺の口縁部である。内湾気味に開いた後、口縁が外側へ大きく広がるものである。17も高壺であり、壺部から脚部にかけての括れ部分の資料である。18・19は底部であり、いずれも平底を呈する。復元径はそれぞれ、約9.1cm、約13.2cmを測る。形態的にみて、壺に伴う底部と考えられる。

20は須恵器の体部片である。外面には格子目のタタキ痕、内面には同心円の当て具痕が残る。



第5図 範囲確認調査の出土遺物① (石器S=1/2、土器S=1/3)



第6図 純圓確認調査の出土遺物②（土器 S = 1/3）

表2 遺物観察表（範囲確認調査・石器類）

回	番号	出土地区 場所	種類	石材	測量				備考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
5	1	TP15-Ⅱ	打撲石斧尖端	燧灰岩	15.7	5.9	2.5	253.6	
	2	TP15-Ⅲ	打撲石斧	頁岩	12.5	6.2	2.5	165.5	
	3	TP20-Ⅲ	磨擦石斧	頁岩	5.4	4.7	1.8	74.0	
	4	TP21-Ⅰ	刮削石器	黑曜石	4.2	2.9	0.8	7.3	

表3 遺物観察表（範囲確認調査・土器類）

回	番号	出土地区 場所	種別	器種	文様・圖案		色調		焼成	胎土	備考
					内面	外腹	内面	外腹			
6	5	TP21-Ⅳ	陶文土器	壺形	ナメ	貝殻表面 にぼい黄褐色	明黃褐色	黄	角閃石・石英・長石	閃光赤板	
	6	TP21-Ⅴ	陶文土器	壺形	ナメ	貝殻表面 にぼい黄褐色	明黃褐色	黄	角閃石・石英・長石	閃光赤板	
	7	TP21-Ⅱ	陶文土器	壺形	ナメ	貝殻表面 にぼい黄褐色	明黃褐色	黄	角閃石・石英・長石	閃光赤板	
	8	TP16-Ⅵ	陶文土器	壺形	ナメ	ナメ	深褐色	褐色	黄	角閃石・石英・長石 赤褐色斑子・最大2mmの砂粒	平底
	9	TP18-Ⅶ	陶文土器	壺形	擦過	擦過	にぼい黄褐色	にぼい黄褐色	黄	角閃石・石英・長石	
	10	TP22-Ⅲ	陶文土器	壺形	擦過	擦過	にぼい黄褐色	明黃褐色	黄	角閃石・石英・長石 赤褐色斑子	
	11	TP21-Ⅷ	陶文土器	口	ナメ	ナメ 内側ナメ	明黄色 少紫鐵斑	青灰色	黄	石英・長石	復元口模範品
	12	TP20-Ⅳ	陶文土器	壺形	擦過	ナメ	赤褐色	赤褐色	黄	角閃石・石英・長石	
	13	TP21-Ⅹ	陶文土器	壺形	ナメ	ハラミガキ	にぼい黄褐色	にぼい黄褐色	黄	石英・黒色斑子	
	14	TP12-Ⅹ	陶文土器	壺形上部	ハケ目	ナメ	にぼい黄褐色	明黃褐色	黄	角閃石・石英・長石 金褐色・赤褐色斑子	
7	15	TP21-SK1	陶生土器	壺形土器	ハケ目	ハケ目	三角突帯 褐色	明黃褐色	黄	角閃石・石英・長石	
	16	TP12-Ⅸ	陶生土器	壺形	ナメ	ナメ	褐色	褐色	黄	角閃石・石英・長石 赤褐色斑子	
	17	TP12-Ⅹ	陶生土器	壺形	ナメ	ナメ	明黃褐色	明黃褐色	黄	角閃石・石英・長石 赤褐色斑子	復元品
	18	TP12-Ⅺ	陶生土器	壺形	ナメ	ナメ	にぼい黄褐色	明赤褐色	黄	角閃石・石英・長石	復元品
	19	TP13-Ⅰ	陶生土器	壺形	ナメ	ナメ	指捺引き	にぼい黄褐色	黄	角閃石・石英・長石	復元品
	20	TP10-Ⅰ	陶生土器	壺	同心円状の当て具 底	ナメ	青灰色	青灰色	墨石		

第3節 本調査

1. 調査の概要

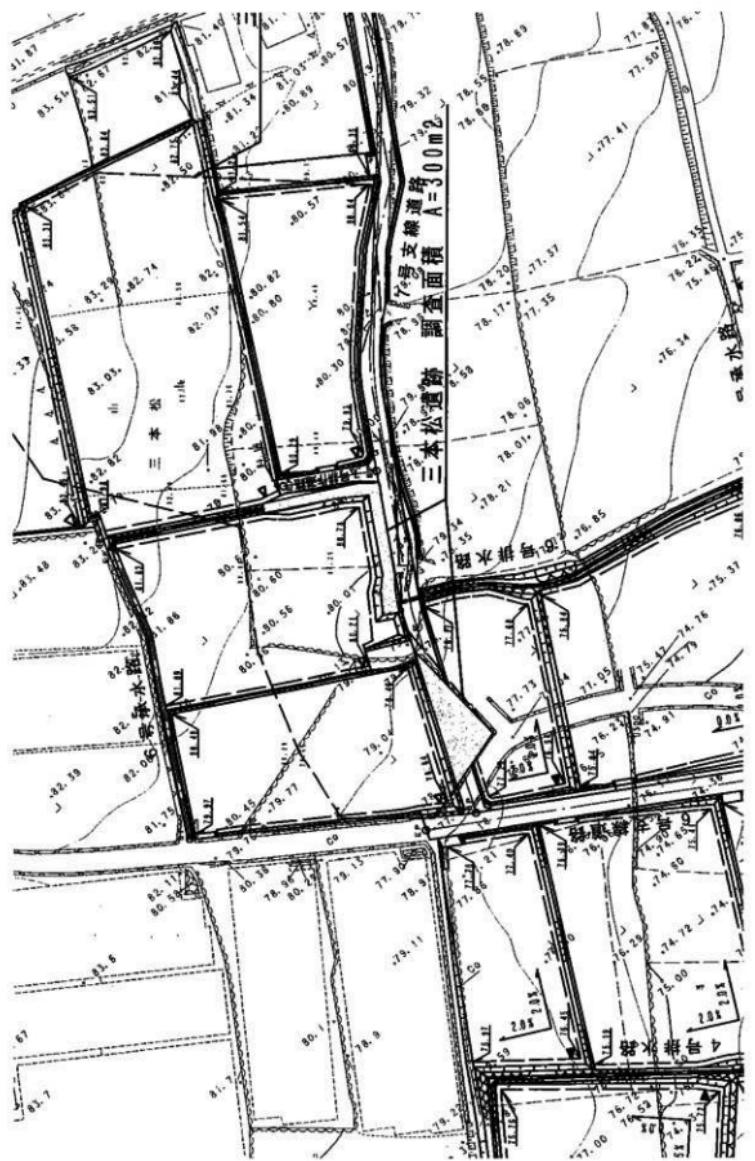
本調査に至った経緯については前節に述べたとおりであり、調査は平成19年10月4日から同年11月9日の期間にかけて実施した。調査区が2地区に分かれていたため、便宜的に現況圃場の切り取りに係る三角形の地区を1区、排水路設置に伴う「L」字状の地区を2区として扱った。遺物包含層に至るまでの上部の層については、当該地区的施工に係る業者の協力を得て重機による剥ぎ取りを行い、包含層掘削からの作業を人力によって行った。包含層掘削および造構検出作業を行うにあたっては、4m四方を目安とする区割りを設け、調査区番号にアルファベットを付して整理した。遺物はグリッドおよび層位ごとの一括によって取り上げを行っている。工事期間や本書後半で述べる木場製鉄遺跡への対応など、期間的に差し迫った状況であったことから、グリッドの方位等については任意で設定し、造構等測量業務を委託した際に調査区全体を世界測地系へ取り込むという形での対応を図った。V層の明褐色土層上面で検出した造構の掘削後に記録測量、造構および土層の撮影、調査区全体の空撮などを行っている。これらの作業の後、造構面を形成する明褐色土層についても確認のための人力掘削を行い、繩文土器片がごく少量出土している。ただし調査に与えられた時間が殆ど残されていなかったことと、試掘時に確認していた遺物包含量が僅かであったことから、V層の出土遺物については地区一括で取り上げている。調査終了後においては、直ちに工事が開始されることから埋め戻しは行わず、現場を関係者へ引き渡している。

2. 層位（第7、10～12図）

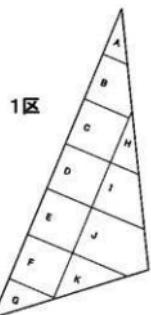
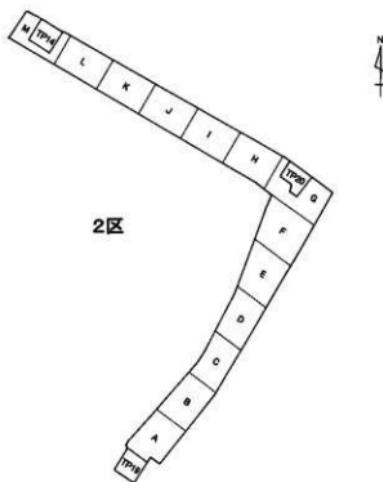
調査区付近の基本的な土層堆積については前節で触れたとおりであるが、範囲確認調査時に遺物包含層とした黒褐色土については、本調査の段階において土質や色調などの微細な違いから二分する事となった。1区と2区の間でも若干の違いがみられ、概念的な対応を図るならば第7図のとおりとなる。本調査2区のⅢ層は遺物包含層としてはいるものの、包含量は少なく、遺物の状態もあまり良くない。耕作基盤土の下層部分と捉えても差し支えのない程度である。要点として、本調査における主

範囲確認調査	本調査（1区）	本調査（2区）
I層（表土）	I層（表土）	I層（表土）
II層	II層 砂礫の多く混ざる暗褐色土	II層 砂礫の多く混ざる暗褐色土
III層 遺物包含層 黒褐色土	III層 砂礫を微量含む、やや締りの弱い 黒褐色土 IV層 遺物包含層 きめの細かい暗灰色土	III層 遺物包含層 砂礫を微量含む、にぶい黒褐色土 IV層 遺物包含層 やや締りの弱い、にぶい黒褐色土
IV層 火山灰質明褐色土	V層 火山灰質明褐色土	V層 火山灰質明褐色土

第7図 基本土層対応図



第8図 三本松遺跡 地質地圖 (S=1/1,000)



0 10 20m

第9図 三本松遺跡 調査区配置図 ($S = 1/400$)

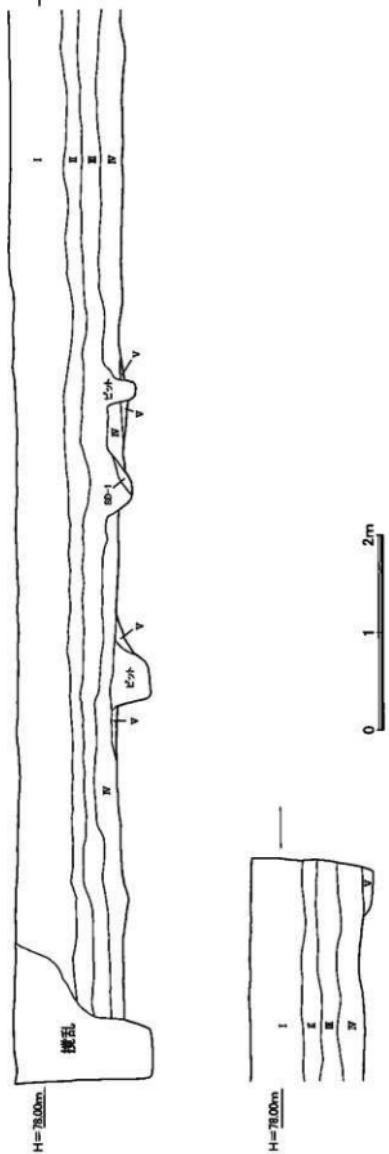
な遺物包含層が1区・2区ともにIV層ということと、範囲確認調査時にIV層とした明褐色土層が本調査段階においてはV層となっている点を述べておきたい。

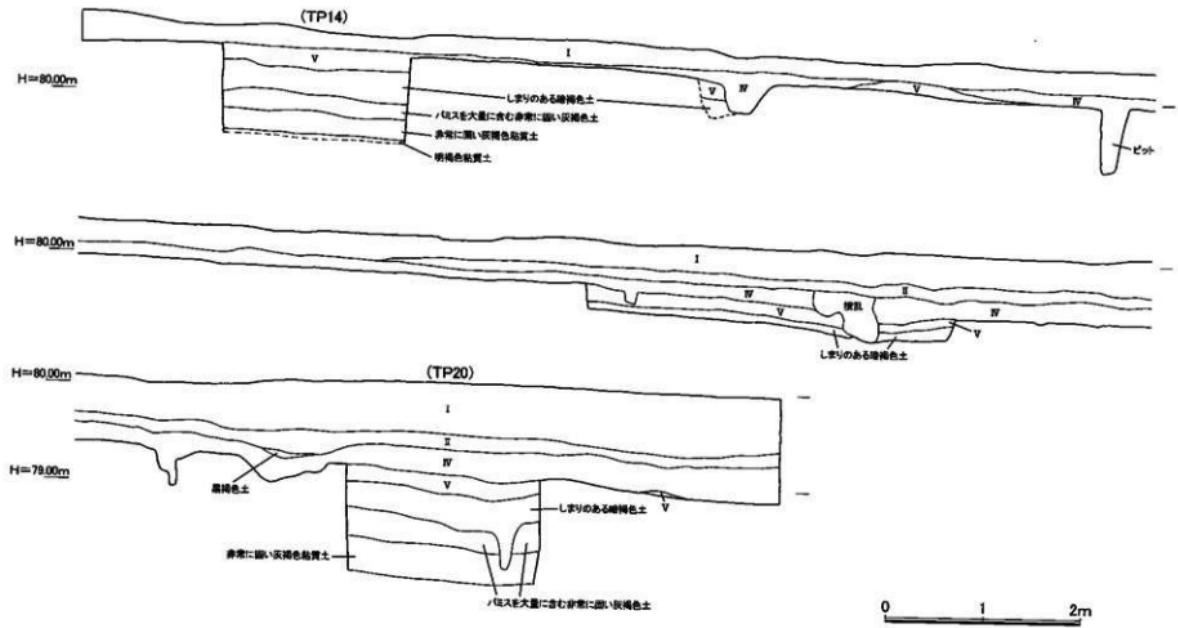
3. 遺構（第13・14図）

遺構はV層の明褐色層上面から掘り込まれたものが主とみられるが、IV層上面からの掘り込みも確認した。III層とIV層の土質および色調の違いはあまり明瞭でなく、範囲確認調査時に本調査のIII層に相当する層が遺跡全体に拡がる状況ではなかったことから認識も不足していた為、IV層に掘り込まれた遺構については、IV層の掘削を開始してから土層断面の観察を踏まえて認識するに至った。またこれが明褐色層に至るまでの層を二層に分けるきっかけにもなった。1区のSD-1は土層観察からIV層上面の遺構であり、龍泉窯系青磁碗の口縁が出土していることから、中世以降に埋没したと考えられる。V層上面において検出に至った遺構の一部には、本来IV層からの遺構であり、SD-1と同じ中世以降のものも含まれている可能性があるが、古墳時代以降の遺物そのものが希薄であり、遺構内からの出土もみられないため厳密には区分できない。IV層中では縄文時代晚期、弥生時代中期および後期頃を主として縄文時代早期の遺物も混在していることから、弥生時代の後期頃に形成された二次堆積層の上に、中世の遺構が掘り込まれていたものと考えられる。遺物量から想定すると、中世段階の遺構はさほど多くないと考えられる。

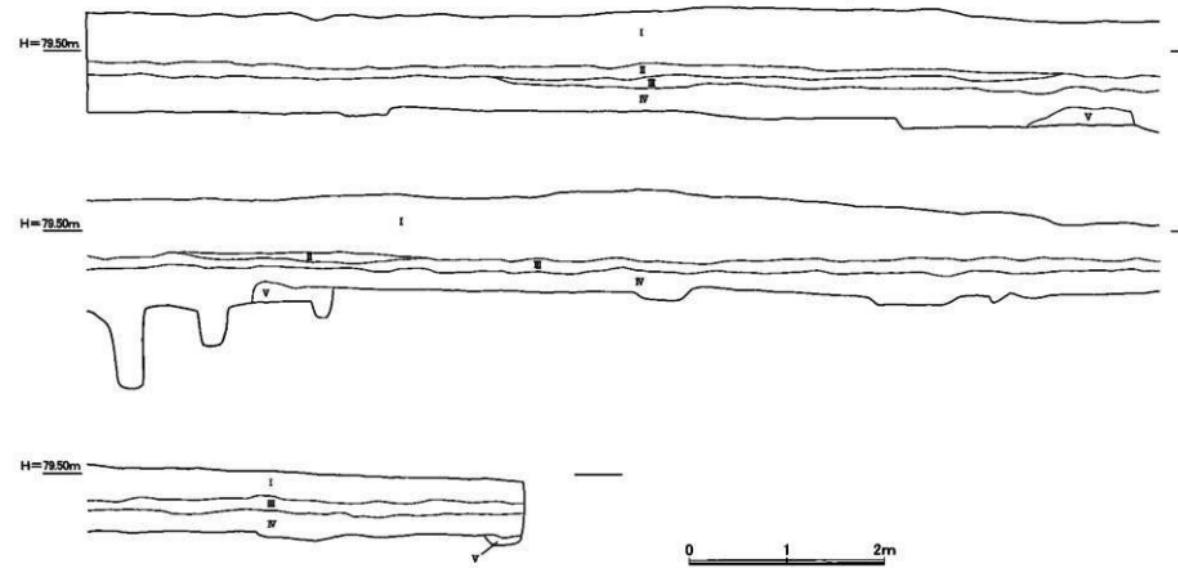
遺構の種類としてはピット、溝状遺構などが検出された。1区の東側は全体的に搅乱を受けている状況がみられたが、これについては既存の進入道や、石積みを設けた際の工事の影響によるとみられる。遺構内からの出土遺物があまり無く、時期については正確には判らないが、先に述べたIV層の形成時期から考えると弥生時代後期頃までの遺構が主と考えられる。遺構の性格は集落の一部を成すものであったとは想定されるが、居住に関する遺構は検出されなかった。ピット群については、底面の深度を踏まえ建物としての配列を模索したが、確固たるものはない。

图10 三本松道路 1区南壁土质图 (S=1/50)

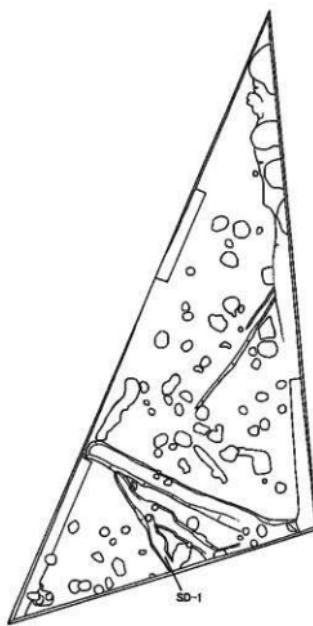




第11図 三本松遺跡 2区北壁土層図 (S = 1/50)

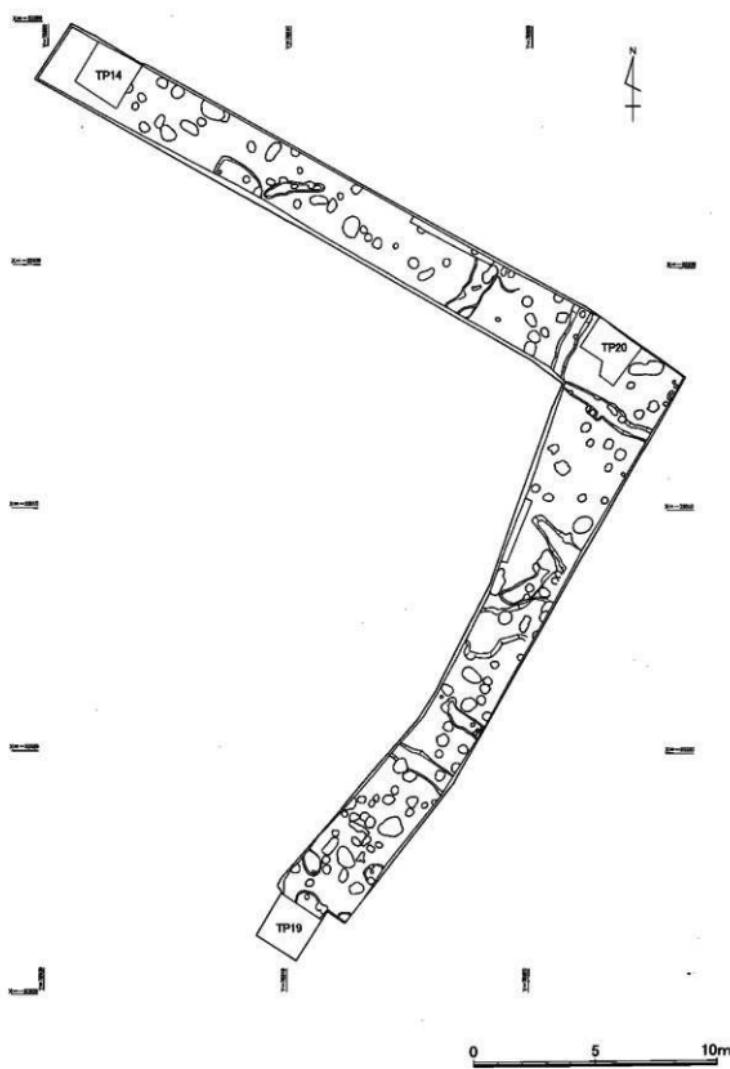


第12図 三本松道路 2区東壁土層図 ($S = 1/50$)



0 5 10m

第13図 三本松遺跡 1区造構平面図 ($S = 1/200$)



第14図 三本松造跡 2区造構平面図 ($S = 1/200$)

4. 遺物（第15～21図）

本調査において出土した遺物の点数は、石器・石材90点、縄文土器343点、弥生土器729点、古墳時代～中近世までの土器・陶磁器類27点である。大半の遺物がIV層の遺物包含層から出土したものである。101点を図化しているが、調査区付近で表探した特徴的な遺物4点も併せて図化しており、上の集計はこの分を含めて行っている。縄文土器・弥生土器を中心に総点数は1,000点を上回るが、概ね小片・細片が大半を占めている。同一個体となるものも多分にあると考えられるが、判別のつかない場合は一点として数えている。遺構内から出土している遺物も少量あるが、同一ピット内に弥生土器片と縄文土器片が含まれている場合もあり、包含層出土遺物の時期が混在していることと併せ、遺跡の埋没が二次堆積による可能性が高いことを示している。そうした点から、以下では調査全体で出土した遺物を一括して、時期と種類の大別によって報告している。

石器

21・22は板状石材を素材とした打製石斧の未成品である。21は左側縁に成形の痕が残り、基部の作出もみられる。22は刃部の作出と右側縁に成形の痕がみられる。基部側が大きく欠損しており、製作は途中で放棄されたと考えられる。23は安山岩製削器の未成品と考えられる。平面観は継長の台形状であり、断面形は潰れた三角形を呈する。主要剥離面の周縁に粗い二次加工の痕がみられる。裏面には自然面を多く残す。24は安山岩製の石匙であり、継長の形態を呈する。上端に抉りを入れ、つまみを作出する。刃部成形のための二次加工は片面からのみ施される。25は黒曜石の横長剥片を素材とした石匙である。下部に二次加工による弧状の刃部を作出する。上端には自然面が残る。26は頁岩製の石庵丁であり、肩のやや下がる外湾刃半月形を呈する。摩耗が著しいため、鏽は不明瞭となっている。紐通し用の穴が両側からの穿孔によって2個施される。27は砂岩の棒状素材を用いた砥石である。片面のみの使用であり、裏面においては割面がそのまま残る。上端と下端には敲打痕もみられる。28は自然石の棒状石材を用いた砥石であり、断面はいびつな三角形を呈する。使用に際して面の使い分けがあつたらしく、3面あるうちの2面では長軸方向に長い使用痕がみられるのに対し、残り1面においては長軸に対して直交ないし斜位の使用痕がみられる。上端および下端附近には敲打痕が残り、敲石として使用されたことも考えられる。29は磨石の一種である。小豆色の頁岩を素材とし、棒状の形態を呈する。断面形状は方形であるが、研磨により角は丸みを帯びる。小型品であることから、細かい作業に用いられたものと考えられる。

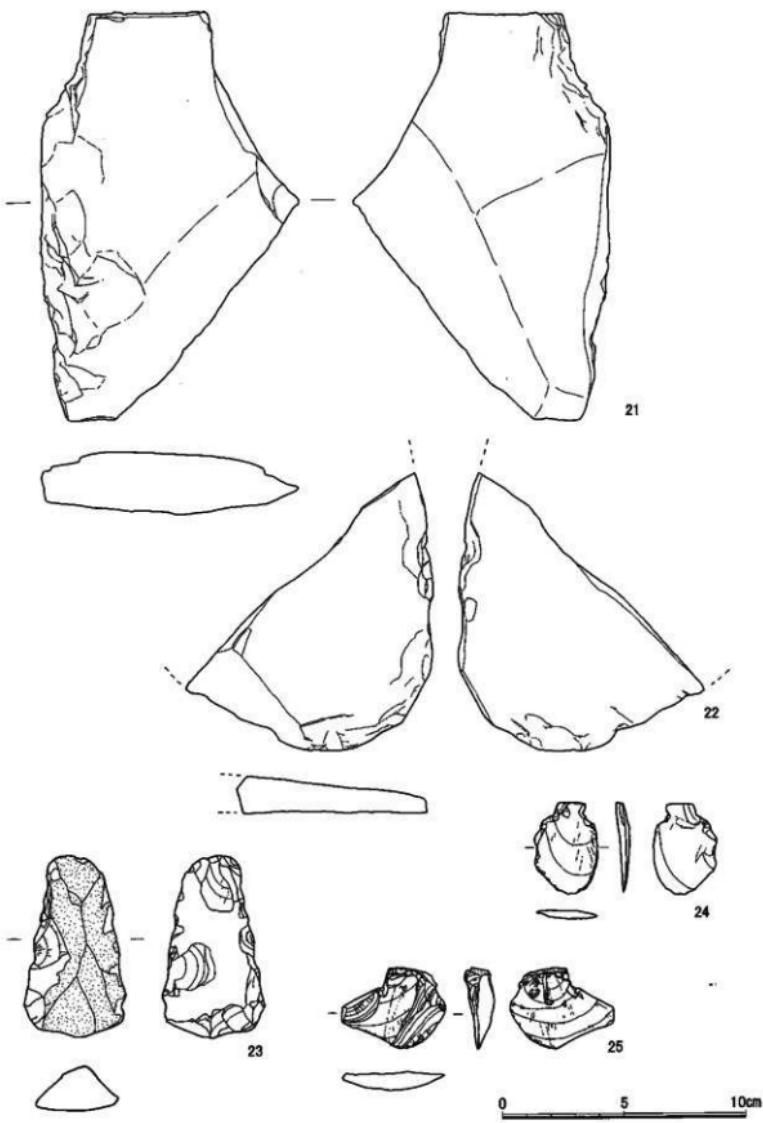
縄文時代早期の土器

32～43は縄文時代早期前半の円筒条痕系土器である。在地の型式名称によれば一野式土器に相当するものである。器種はいずれも深鉢と考えられる。32～35は口縁部片、36～41は体部片であり、いずれも貝殻腹縁による横位の条痕が施されるものである。35・41に施された条痕はやや蛇行する。38は貝殻条痕の下位に、継位の撲糸文が施される。42・43は平底を呈する底部片である。

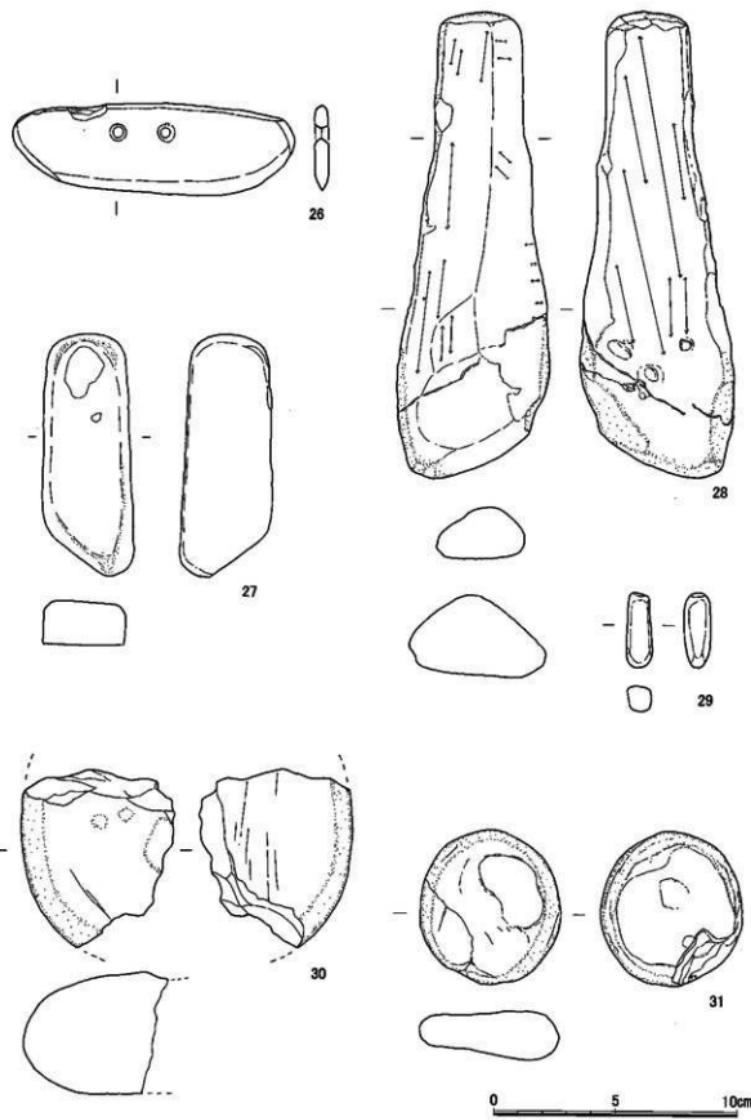
44・45は円筒条痕系土器群に後続する段階の厚手無文土器であり、器種はいずれも深鉢と考えられる。

縄文時後晩期の土器

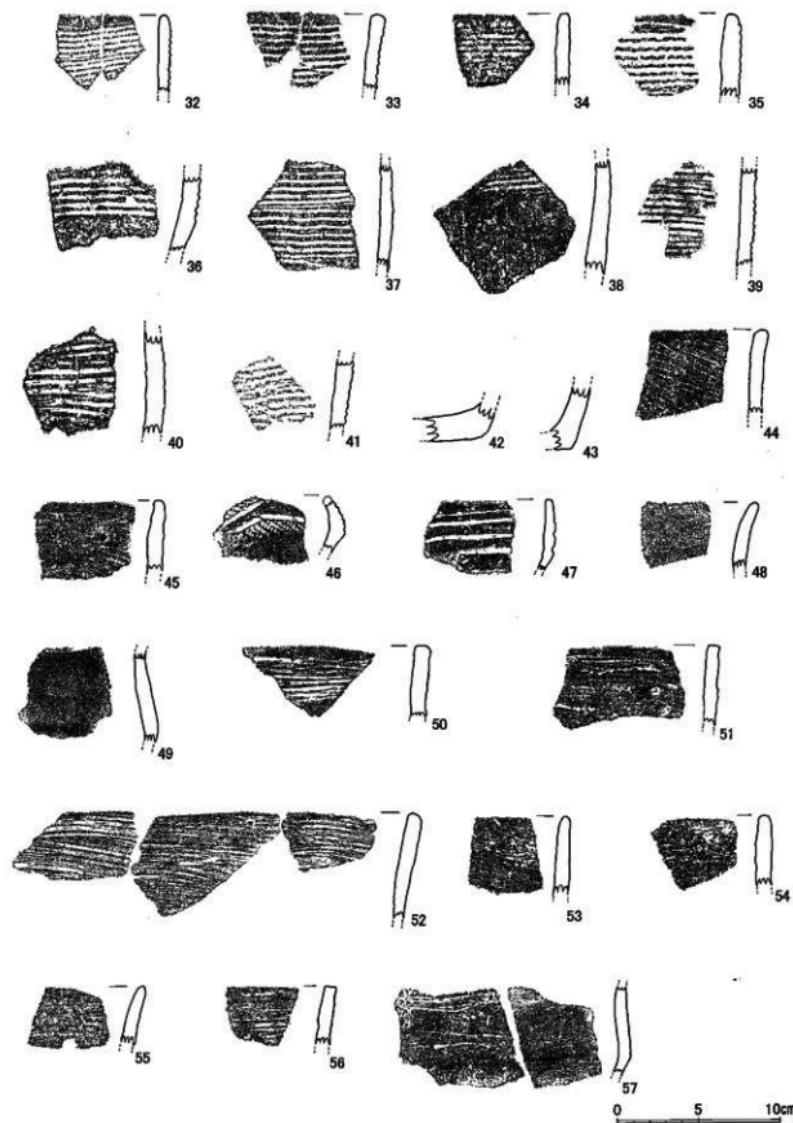
46は磨消縄文土器であり、波状口縁を呈する深鉢の口縁部である。山形を呈する二条の沈線が施され、その上位と下位には縄文が残り、内部の縄文は磨り消されている。



第15図 三本松遺跡出土遺物・石器① (S=1/2)



第16図 三本松遺跡出土遺物・石器② (S = 1/2)



第17図 三本松遺跡出土遺物・土器類① (S = 1 / 3)



第18図 三本松遺跡出土遺物・土器類② (S=1/3)

47～89は縄文時代晩期の土器であり、47～68は深鉢、69～84は浅鉢、85～89は底部の資料である。

47～49は、研磨に近い丁寧な工具調整が器面に施されるものである。47は直立気味に立ち上がるタガ状の口縁部である。外面に沈線が4条残る。48はやや外反して開く口縁部である。49は体部の屈曲部付近である。張りはさほど強くなく、稜も不明瞭である。

50～68は条痕系の深鉢である。50～56、62～64、67・68は口縁部片であり、57～61、65・66は体部片である。50、52、58、59はやや厚めの造りで、相対的に粗めの条痕が施される。50～52、54、56、62、63は口唇部が面取り気味であり、53、55の口唇部は丸みをもつ。63～65は外面に沈線が施されるものであり、65は沈線の下位に擦ネクタイ状の貼付が残る。66は外面に指刻み風の貼付がみられる。67、68は薄手の口縁であり、67は端部に丸みをもち、68は端部が外方へ先細りする。

69～74は精製浅鉢であり、いずれも口縁の残る資料である。69は口縁から肩部にかけての資料であり、復元口径は約28.8cmを測る。口縁は短く開き、端部は上方へ小さく折れる。端部外面には沈線が一条施され、内面には段を有する。70は口縁が短く開き、端部は肥厚する。端部内外面に沈線が一条ずつ施される。71はやや厚手の造りのもので、口縁は屈曲部からやや開き気味に立ち上がり、端部の外面が肥厚する。72は口縁が外反して開くものであり、口唇部に沈線が一条施される。73は口縁が直線的に開き、端部の内面側が肥厚することで段を形成している。74は口縁が短く開くものであり、端部の外面には沈線が一条施され、内面には段を有する。肩部は丸みをもつ。

75～84は粗製の浅鉢である。75は口縁が内湾して開くものであり、ボウル状を呈するものと考えられる。口縁端部は丸みをもつ。器面の劣化が著しく、剥落が目立つ。76は口縁が直線的に開くものであり、端部は面取り気味となる。77は口縁が内湾して開くものである。78は口縁が直線的に開き、端部は一旦細ったのち肥厚気味となる。下端に段を残しており、下位に組織痕を伴うものであった可能性が考えられる。79～84は組織痕の残る資料である。79、80は外面に屈曲がみられ、その下位に網目の組織痕を残すものである。80の屈曲がより顕著である。81～84はアンギンの組織痕を残す資料である。

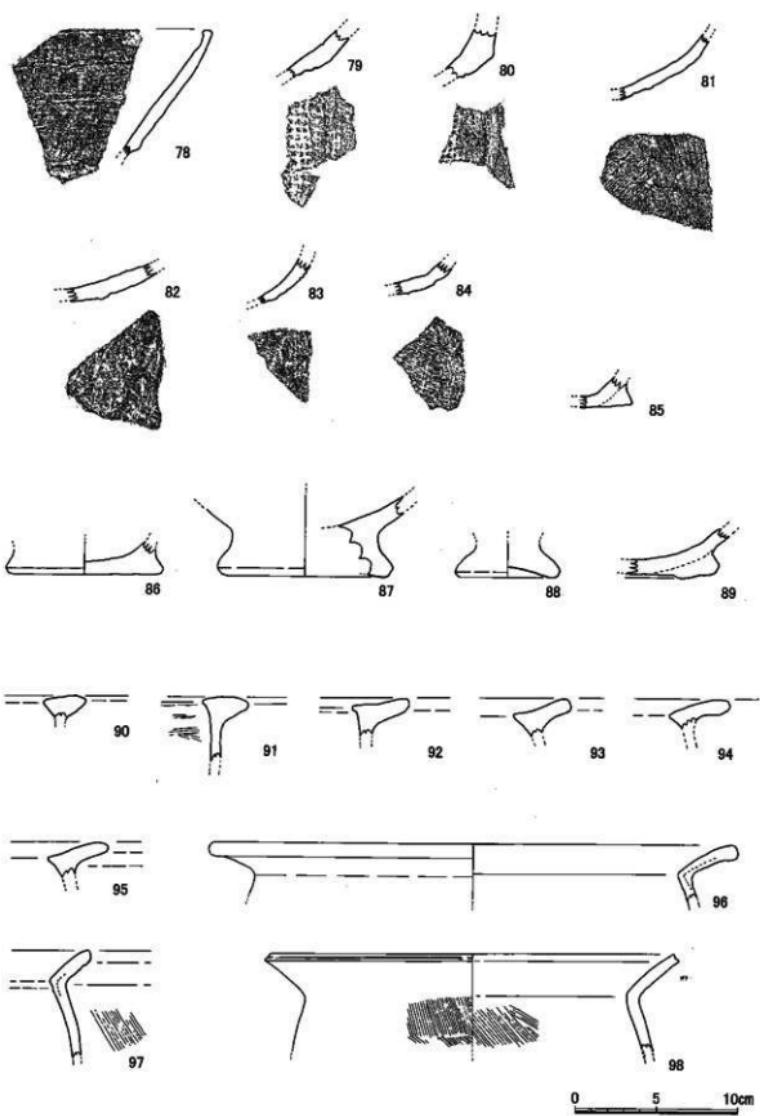
85～89は底部であり、接続部が外方に張り出すという点において共通した特徴をもつ。85、86は張り出しが小さく、底面は平坦となるものである。86の復元底径は約9.3cmを測る。87は張り出しが大きく、底は分厚い造りとなっている。底面がややへこみ、端部は丸みをもつ。復元底径は約10.2cmである。88はやや小振りなものであり、復元底径は約6.0cmを測る。底面はへこんでおり、端部は丸みをもつ。体部にかけてのくびれは強い。89は底部外縁に粘土を貼り付け、張り出しをつくる。底面はややへこむ。

晩期の土器についてはおよそ古閑式段階のものからみられ、黒川式段階のものが主をなすようである。

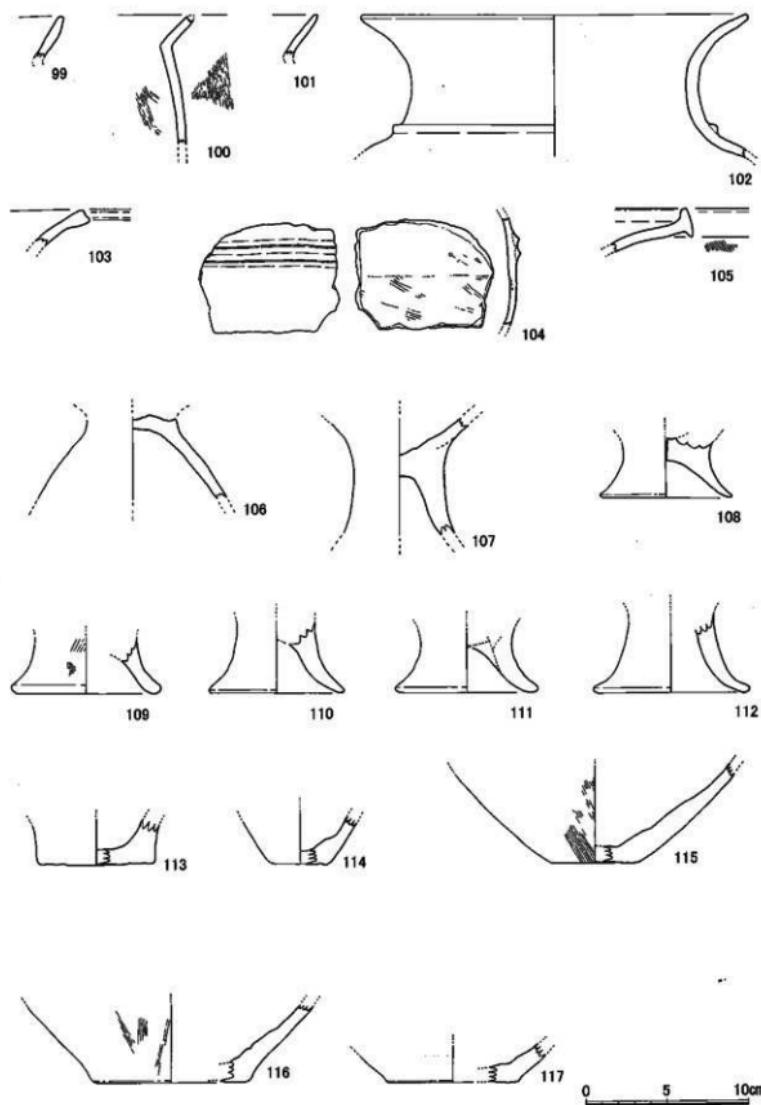
弥生土器

90～96は弥生時代中期頃の壺形土器であり、口縁部の資料である。90、91は口縁端部が丸みのある三角形状に肥厚するものである。外方に張り出す形であるが、内面側も小さく突起する。

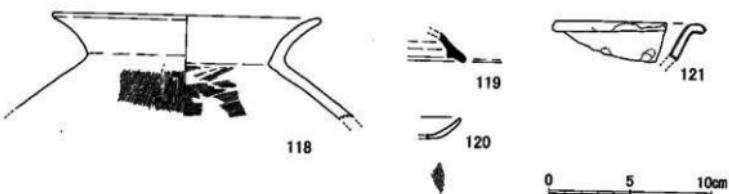
92は口縁が逆し字状を呈するもので、わずかに上向きとなる。端部は丸みを持ち、口縁内面は小さく突起する。93～95は口縁が跳ね上げ気味になるものである。いずれも端部にかけて僅かに垂れ気味となり、端部は丸くおさめる。96は「く」字状の口縁を呈するものであり、端部は垂れ気味となる。



第19図 三本松遺跡出土遺物・土器類③ (S = 1 / 3)



第20図 三本松遺跡出土遺物・土器類④ (S = 1 / 3)



第21図 三本松遺跡 出土遺物・土器類⑤ (S = 1/3)

復元口径は約32.4cmを測る。

97~101は弥生時代後期頃の壺形土器であり、「く」字状の口縁を呈するものである。全体的に口縁の立ち上がりが強い傾向がみられる。97、98、100は体部まで残っており、その張りはあまり強くない。98は復元口径約25.8cmを測るもので、口唇部は強いナデにより凹状となる。

102~104は壺形土器である。102は広口壺であり、口縁は強く外反して開く。復元口径は約24.0cmである。頭部外面には断面三角形の突帯が一条巡らされる。磨滅が著しい。103は口縁部であり、口唇部がナデにより凹状となる。104は体部であり、外面には断面三角形の突帯が二条巡らされる。

105~107は高壺形土器である。105は大きく開く口縁部であり、端部は上下へ拡張される。106は脚部であり、坏部との境から内湾気味に大きく開く。107は坏部から脚部にかけてのくびれ部である。脚部の上位は細身であり、緩やかに外反して開く。

108~112は台付壺の脚台部である。いずれも外反して強く開くものである。108、110~112は端部が先細り気味となり、109は厚みをもったまま、端部が丸くおさめられる。底径ないし復元底径は108より順に約8.1cm、約8.7cm、約8.1cm、約8.7cm、約9.0cmである。

113~117は底部の資料である。113は壺に伴うものであり、114~117は壺に伴うものと考えられる。いずれも平底を呈する。113は復元底径が約7.4cmを測るものであり、直立気味に立ち上がって開く。114、115は接地面より膨らみをもって開くものである。114は小さめのものであり、復元底径は約3.6cmである。115は器体がやや大きめになるものとみられる。復元底径は約5.3cmである。外面下位から底面にかけて一次焼成時の黒斑がみられる。116、117は外面が軽く括れて開くものである。116は大きめの壺に伴うものと考えられる。復元底径は約9.8cmを測る。117は外面に丹塗磨研が施される資料である。復元底径は約8.1cmを測る。

古墳時代以降の遺物

118は古式土師器の壺である。復元口径は約16.8cmを測る。口縁は強いナデによって外反しており、肩部は張りの強い形態となる。体部内外面には目の細かいハケ目が施される。119は須恵器の杯蓋口縁である。口縁端部に“かえり”をもつ。120は土師器の小皿である。底部から口縁にかけて直線的に開く。底面には糸切り痕が残る。121は龍泉窯系の青磁碗口縁である。器面には明るい緑色のガラス釉がかかる。口縁は外方へ強く折り曲げられ、端部は丸みをもつ。

〈参考文献〉

- 清田純一 1998 「縄文後・晚期土器考」「肥後考古」
- 下條信行 1977 「九州における大陸系磨製石器の生成と展開」「史淵」第114輯 九州大学文学部
- 中尾篤志 編 2006 「肥賀太郎遺跡」長崎県文化財調査報告書第189集 長崎県教育委員会
- 本多和典 2006 「土器・土製品」「椎現脇遺跡」深江町文化財調査報告書第2集 深江町教育委員会
- 水ノ江和同 1998 「九州における押型文土器の地域性」「九州の押型文土器—論巧編—」九州縄文研究会
- 山崎純男・島津義昭 1981 「九州の土器」「縄文文化の研究』4 雄山閣
- 渡邊康行 2006 「石器・石製品」「椎現脇遺跡」深江町文化財調査報告書第2集 深江町教育委員会

表4 三本松遺跡出土遺物観察表(石器類)

図	番号	出土地区 場所	種類	石材	石器				備考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
15	21	2-H-N	打製石斧尖端部	麻原岩	16.7	16.5	3.6	531.2	
	22	2-P-N	打製石斧尖端部	麻原岩	9.7	9.7	1.5	152.0	
	23	2-P-N	刮削器尖端部	麻原岩	7.4	4.0	1.8	56.3	
	24	2-D-N	石塊	安山岩	3.7	2.6	0.3	4.3	
	25	2-A-N	石塊	黑曜石	3.3	4.2	0.7	8.5	
	26	2-C-N	石斧丁	黄碧石	2.7	11.5	0.5	45.1	両刃、直孔×2
16	27	1-J-N	砂岩	砂岩	9.8	3.7	1.8	126.4	
	28	2-B-N	陶土器	砂岩	16.7	6.3	3.2	432.0	
	29	2-F-N	研磨工具	チャート	5.9	1.1	1.0	5.6	
	30	2-D-N	陶土器	砂岩	7.1	6.3	1.8	266.6	
	31	2-A-N	陶土器	砂岩	6.4	5.8	2.0	99.7	

表5 三本松遺跡出土遺物観察表(土器類)①

図	番号	出土地区 場所	種類	器種等	文部・調査		色調		鏡成	出土	備考	
					内面	外側	内面	外側				
	32	1-D-N	純土器	擦鉢	ナテ	黄褐色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子	円筒形		
	33	1-D-N	純土器	擦鉢	ナテ	黄褐色	黄褐色	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子	円筒形		
	34	1-B-N	純土器	擦鉢	ナテ	黄褐色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子	円筒形		
	35	2-N	純土器	擦鉢	ナテ	黄褐色	に古い黄褐色	に古い黄褐色	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子	円筒形	
	36	2-V	純土器	擦鉢	陶おひき	黄褐色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子	円筒形		
	37	1-D-N	純土器	擦鉢	ナテ	月桂赤痕	に古い黄褐色	に古い黄褐色	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子・2mmの赤斑	円筒形	
	38	2-I-N	純土器	擦鉢	ナテ	月桂赤痕	陶ホルム	に古い黄褐色	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子・2mmの赤斑	円筒形	
	39	2-I-N	純土器	擦鉢	工具によるナテ	黄褐色	に古い黄褐色	穀壳	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子	円筒形	
	40	萬	萬土器	擦鉢	ナテ	月桂赤痕	に古い黄褐色	に古い黄褐色	良	角閃石・石英・黄碧石・4mmの赤斑	円筒形	
	41	2-V	純土器	擦鉢	ナテ	黄褐色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石	円筒形		
	42	2-T-N	純土器	底盤	ナテ	陶ねえき	穀壳	穀壳	良	角閃石・石英・黄碧石・2mmの平底		
	43	1-D-N	純土器	底盤	工具によるナテ	ナテ	穀壳	穀壳	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子・2mmの赤斑	平底	
	44	1-N	純土器	擦鉢	擦鉢→擦おひき	ナテ	明黄色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子	手取鉢	
	45	2-T-N	純土器	擦鉢	擦鉢→擦おひき	ナテ	に古い黄褐色	に古い黄褐色	良	角閃石・石英・黄碧石	手取鉢	
	46	2-I-N	純土器	擦鉢	工具によるナテ	ミキナテ	に古い黄褐色	に古い黄褐色	良	角閃石・石英・黄碧石・1mmの赤斑		
	47	2-I-N	純土器	擦鉢	工具によるナテ	工具によるナテ	明黄色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子		
	48	2-D-N	純土器	擦鉢	工具によるナテ	工具によるナテ	黒斑	に古い黄褐色	良	角閃石・石英・黄碧石		
	49	2-T-N	純土器	擦鉢	工具によるナテ	工具によるナテ	明黄色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子		
	50	2-G-N	純土器	擦鉢	ナテ	工具によるナテ	に古い黄褐色	に古い黄褐色	良	角閃石・石英・黄碧石・2mmの赤斑		
	51	2-F-N	純土器	擦鉢	赤痕ナテ消し・擦おひき	赤痕ナテ消し・擦おひき	に古い黄褐色	に古い黄褐色	良	角閃石・石英・黄碧石		
	52	1-F/G/J-N	純土器	擦鉢	ナテ	赤痕	明黄色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子		
	53	2-N	純土器	擦鉢	赤痕ナテ消し	赤痕ナテ消し	明黄色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子		
	54	2-E-N	純土器	擦鉢	ナテ	赤痕ナテ消し	明黄色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石		
	55	2-V	純土器	擦鉢	ナテ	赤痕ナテ消し	明黄色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石		
	56	2-N	純土器	擦鉢	ナテ	赤痕	明黄色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石		
	57	2-A-N	純土器	擦鉢	赤痕→ナテ	に古い黄褐色	に古い黄褐色	穀壳	良	角閃石・石英・黄碧石		
	58	2-E-N	純土器	擦鉢	赤痕ナテ消し・擦おひき	赤痕ナテ消し	に古い黄褐色	に古い黄褐色	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子		
	59	2-N	純土器	擦鉢	赤痕→ナテ消し	赤痕→ナテ	明黄色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石		
	60	2-D-N	純土器	擦鉢	赤痕→工具鋸歯	赤痕→工具鋸歯	明黄色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石		
	61	2-A-N	純土器	擦鉢	工具鋸歯	赤痕ナテ消し	穀壳	穀壳	良	角閃石・石英・黄碧石		
	62	2-F-N	純土器	擦鉢	ナテ	赤痕ナテ消し	明黄色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石		
	63	1-J-N	純土器	擦鉢	ナテ	ナテ→赤痕	穀壳	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子		
	64	2-F-N	純土器	擦鉢	ナテ	ナテ→赤痕	穀壳	穀壳	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子		
	65	1-C-N	純土器	擦鉢	ナテ	ナテ→赤痕・擦本	クライヤ状の粘土	に古い黄褐色	良	角閃石・石英・黄碧石		
	66	2-D-N	純土器	擦鉢	ナテ	ナテ・擦本→粘土	赤痕	明黄色	良	石英・黄碧石・赤色粒子		
	67	2-F-N	純土器	擦鉢	赤痕→ナテ	赤痕→ナテ	明黄色	に古い黄褐色	良	角閃石・石英・黄碧石		
	68	2-F-N	純土器	擦鉢	ナテ	赤痕ナテ	に古い黄褐色	穀壳	良	角閃石・石英・黄碧石		
	69	1-F/G-N	純土器	擦鉢	ナテ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	に古い黄褐色	良	角閃石・石英・黄碧石・赤色粒子	復元口径約25.8cm	
	70	1-K-N	純土器	擦鉢	ヘラミガキ	ヘラミガキ	口縁端部に比較	穀壳	良	角閃石・石英・黄碧石		
	71	2-E-N	純土器	擦鉢	ヘラミガキ	ヘラミガキ	に古い黄褐色	明黄色	良	角閃石・石英・黄碧石		

表 6 三本松遺跡出土遺物觀察表（土器類）②

図	番号	出土地区 層	種別	器種号	文様・質窓		形状	胎土	備考			
					内面							
					内面	外面						
18	72	2-K・N	陶土器	浅鉢	ハマミダギ 口縁部に波	ハマミダギ 口縁部に波	明瞭褐色	明瞭褐色	良 石英・黄石			
	73	2-C・N	陶土器	浅鉢	ハマミダギ 口縁部に波	ハマミダギ 口縁部に波	に赤い質窓	に赤い質窓	良 黄石・赤母・赤色粒子			
	74	I-D・N	陶土器	浅鉢	ハマミダギ 口縁部に波	ハマミダギ 口縁部に波	暗赤褐色	褐色	良 石英・黄石・紫母			
	75	2-B・N	陶土器	浅鉢	ナヂ(漆黒丸八)ナヂ(漆黒丸八)	ナヂ(漆黒丸八)ナヂ(漆黒丸八)	深赤褐色	暗赤褐色	良 角開口・石英・黄石・紫母・赤色粒子			
	76	2-D・N	陶土器	浅鉢	余呂ヌチナヂ	アリガニナヂ	明瞭褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石・紫母・2mmの 砂粒			
	77	2-E・N	陶土器	浅鉢	余呂ヌチナヂ	余呂ヌチナヂ	浅黄色	明瞭褐色	良 角開口・石英・黄石			
	78	2-F・N	陶土器	浅鉢	余呂ヌチナヂ	余呂ヌチナヂ	明瞭褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石			
19	79	表層	陶土器	浅鉢	工芸模様ナヂ	上皮：余呂ヌチナヂ 底皮：波状底(網目)	明瞭褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	80	表層	陶土器	浅鉢	工芸模様ナヂ	上皮：ナヂ(網目) 底皮：波状底(網目)	褐色	明瞭褐色	良 角開口・石英・黄石・赤色粒子			
	81	2-B・N	陶土器	浅鉢	工芸模様ナヂ	上皮：余呂ヌチナヂ 底皮：波状底(網目)	陶色	明瞭褐色	良 角開口・石英・黄石			
	82	2-E・N	陶土器	浅鉢	ナヂ	ナヂ	明瞭褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	83	2-T・N	陶土器	浅鉢	ナヂ	ナヂ	に赤い質窓	明瞭褐色	良 角開口・石英・黄石			
	84	1-N	陶土器	浅鉢	ナヂ	余呂ヌチナヂ	明瞭褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	85	2-G・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	明瞭褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	86	1-I・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	87	1-N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	明瞭褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	88	2-F・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石			
20	89	2-A・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	明瞭褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	90	2-G・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	91	2-H・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	明瞭褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石・青石			
	92	1-D・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	赤褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石・青石			
	93	2-B・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	94	表層	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	褐色	褐色	良 石英・黄石・青石			
	95	1-C・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	褐色	褐色	良 石英・青石・青綠			
	96	2-C・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	明瞭褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	97	2-A・N	陶土器	底盤	ナヂ	口：ナヂ 底：ナヂ	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	98	1-B	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	ナヂ	明瞭褐色	良 角開口・石英・黄石			
21	99	1-F/G・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石・紫母			
	100	1-S	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石・紫母・赤色粒子			
	101	1-F/G・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	褐色	褐色	良 石英・黄石			
	102	2-C・N	陶土器	底盤	ナヂ(網目)	ナヂ(網目)	明瞭褐色	褐色	良 石英・黄石			
	103	2-O・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	104	1-J・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	105	1-D・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	明瞭褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	106	1-D・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石・紫母・赤色粒子			
	107	1-J・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	108	1-E・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石			
22	109	1-C・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	110	1-I・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	111	1-I・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	112	1-C・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	明瞭褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	113	2-D・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	114	1-J・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	115	1-D・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石・紫母・赤色粒子			
	116	2-B・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石・紫母・赤色粒子			
	117	2-E・N	陶土器	底盤	ナヂ	ナヂ	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	118	1-D・N	古式土器	底盤	口：浅いV字 身：波打つV字	口：浅いV字 身：波打つV字	に赤い質窓	褐色	良 角開口・石英・黄石・紫母			
23	119	2-A・N	底盤	ナヂ	ナヂ	褐色	褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石			
	120	2-F・N	土器脚	底	ナヂ	ナヂ	明瞭褐色	褐色	良 角開口・石英・黄石			
24	121	S-D-1	脚部(骨質)	底	明るい褐色のガラス地	二重縁部外方へ凹げ	無	無	無			

第3章 木場製鉄遺跡の調査

第1節 調査に至る経緯

今回調査を実施した地区は、布津東部地区県営畠地帯総合整備事業の工区（1～6工区）内にある。この区域は周知の木場原遺跡の周辺にあたり、事業計画に伴って平成12年度に試掘確認調査が実施されている。その際には、明確な遺構等は確認されず、直ちに本調査対象とはならないものの、鉄滓が多く採取される状況などから、慎重工事および工事立会による対応が必要とされていた。これを受け、平成19年8月31日より工事の立会を行った。

工事立会の結果、103耕区の一部において耕作土を剥ぎ取った段階で、鉄滓が面的に拡がる状況や焼土を確認した。また、轆の羽口や近世の陶磁器片などが採集され、近世の製鉄関連遺跡が存在することが明らかとなった。

立会の結果を踏まえ、長崎県島原振興局農林部土地改良課（現農林水産部農村整備課）および市の関連部局と協議を行い、圃場部分については盛土の調整により遺跡を現地保存することとなったが、排水路設置予定箇所の一部、約80m²については掘削による遺跡への影響が避けられないため、調査による記録保存を行うこととなった。なお本調査開始に至る間、長崎県教育庁へ遺跡発見届を提出し、「木場製鉄遺跡」として新規登録を行っている。

第2節 調査

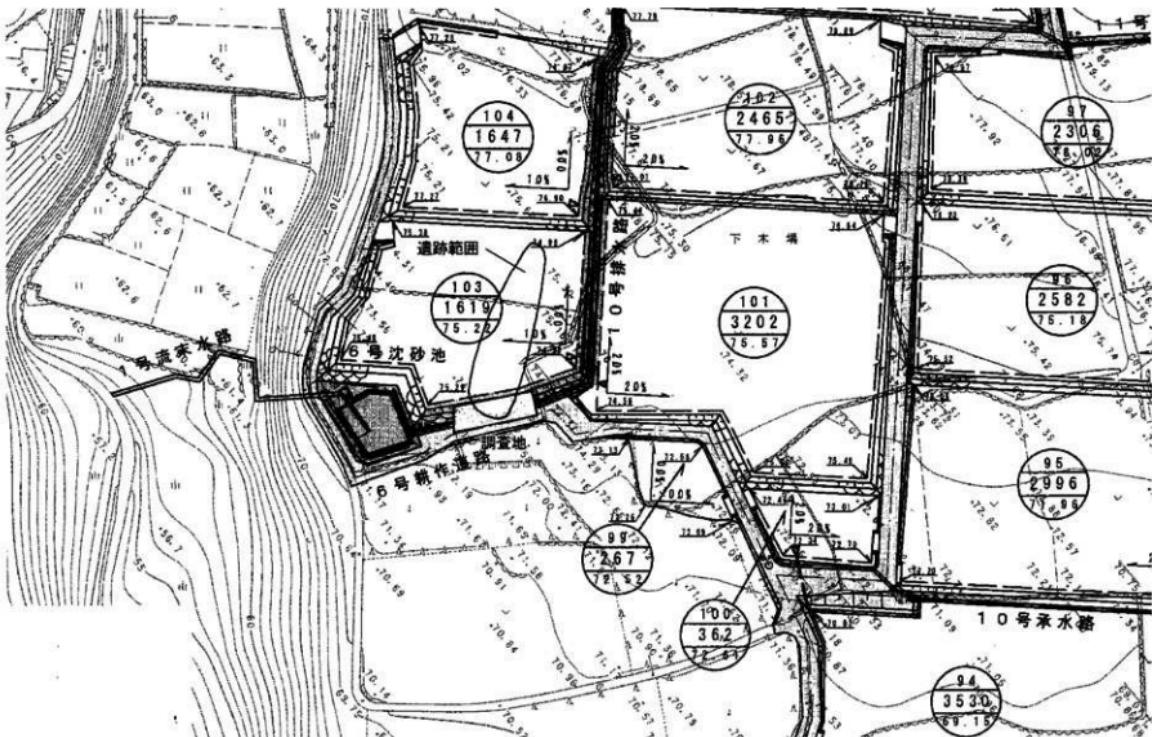
1. 調査の概要

調査は平成19年11月13日より同年11月17日の期間にかけて実施した。工事立会時における表土剥ぎの段階で既に鉄滓が散布する状況を確認していたため、まず調査区内の精査を行い、その分布範囲をより正確に捉える作業から開始した。作業の結果、鉄滓は調査区北側寄りの2／3程の範囲に拡がっている状況を確認した。人力による面的掘削と内容の確認作業を進め、必要に応じて測量および写真撮影を実施している。調査可能な期間が極めて短期であったことと、調査区が比較的狭い範囲であったことからグリッドは設けていない。測量に際しては、調査区周辺に設置されていた工事用杭の座標および標高に関する情報を、当該工区の施工者より提供して頂き、これを用いる事で対応を図った。調査終了後においては、直ちに工事が実施されることから現場の埋め戻しは行わずに引き渡しを行っている。

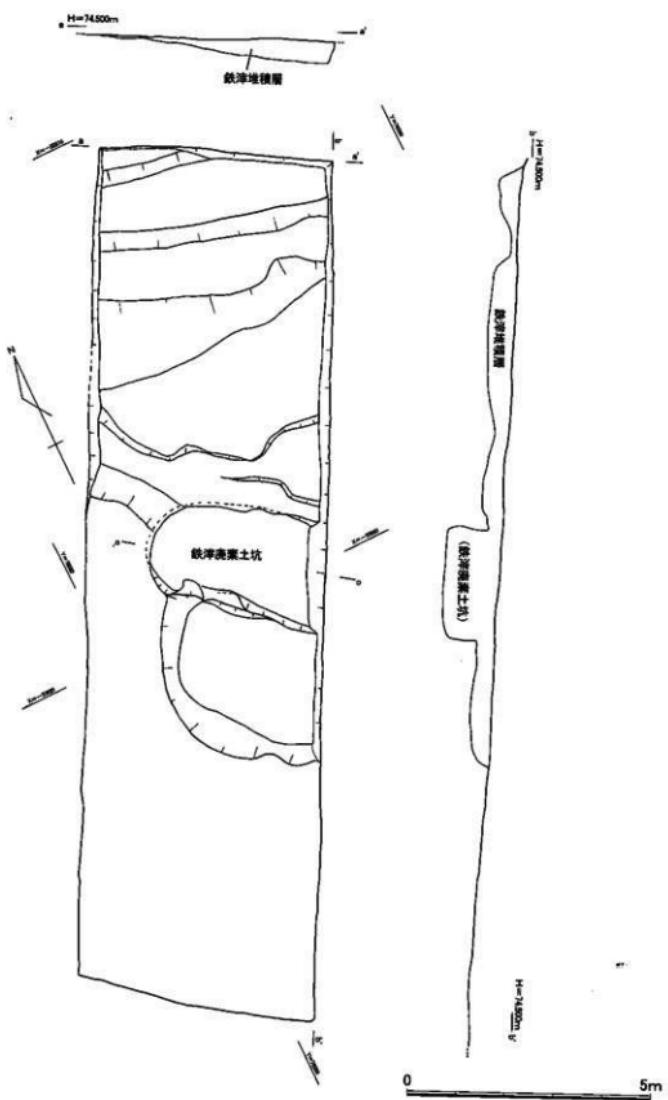
2. 土層および遺構（第23・24図）

土層堆積

掘削を開始するにあたり、鉄滓の堆積深度が不明だったので、調査区中央付近を1m幅で先行掘削し、この確認にあたった。結果として、概ね40cm～70cmの分厚い堆積であることが判った。鉄滓層の下位にみられた土層は、前章の三本松遺跡でV層として扱った火山灰質の明褐色土層であり、これに至るまでの層位は鉄滓の堆積する一層のみであった。鉄滓堆積層の中には、17世紀後半～18世紀頃の陶磁器片や破損した轆の羽口などが幾らか含まれており、調査区付近が近世の製鉄遺跡における鉄滓等の廃棄場所であると認識するに至った。



第22図 木場製鉄跡 調査地周辺図 (S = 1/1,000)



第23図 木場製鐵遺跡 調査区平面図及び土層図 ($S = 1/100$)



第24図 鉄滓廃棄土坑縦断図 ($S = 1/40$)

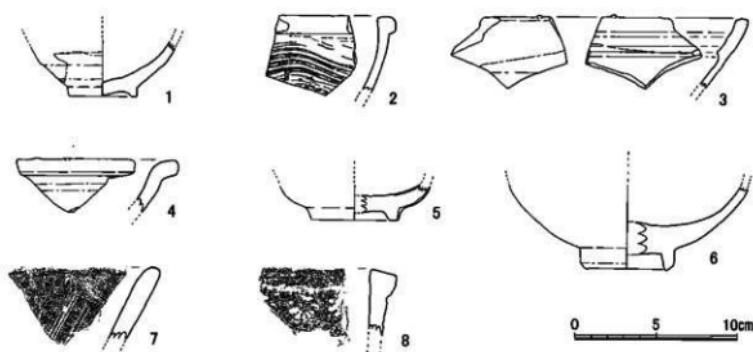
鉄滓廃棄土坑

鉄滓堆積層の面的な掘削を進めるにつれ、これらの鉄滓は幾らかの起伏のある地形に直接廃棄されているかに思われたが、調査区中央東寄りの付近において、地表より40cmほどの深度に比較的大きな土坑が検出された。幅は約2m、長さについては東側が調査区外となるため正確に判らないが、調査区内で確認できる分で約3.5mを測る。隅に角はない、遺構の西端は丸みを帯びた形状となっている。遺構の深さは、西端で約1.2m、調査区東壁の断面においては0.7m～0.9m程度となっている。壁面は内側へやや抉れている。周囲と同様に遺構内は鉄滓によって満たされており、近世の陶器片や繩の羽口片なども出土している。遺構の性格としては、製鉄において発生した鉄滓を廃棄する目的で掘られた土坑と考えられる。土坑の周囲の状況をあわせて考えると、土坑の北側では起伏が強く、南側においては顕著な窪地がみられる。おそらく操業初期の段階ではこの土坑によって廃滓を処理していたが、収まらなくなつたために周囲にも地形の変更を加えて廃棄場所の拡張を図ったのではないかと考えられる。

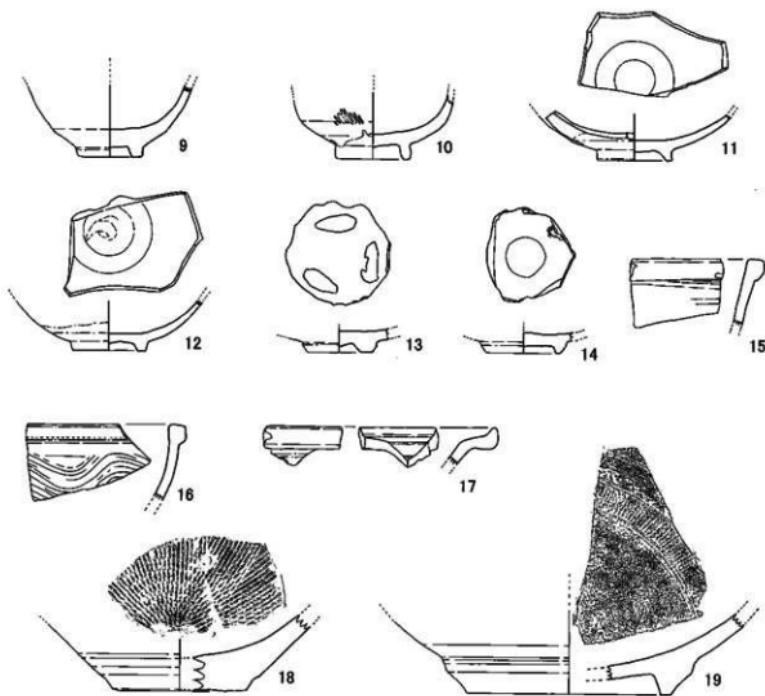
3. 遺物

遺物は調査区付近の立会時に表探したものも含めて、中近世の土器・陶磁器類129点、繩の羽口片67点、石材類13点が出土している。また、先に述べたとおり調査区内には大量の鉄滓が堆積している状態であったが全て回収することは困難であったので、参考としてパンコンテナ10箱分程度を採取している。土器・陶磁器類について中世段階のものは僅かであり、殆どは江戸期の陶磁器類である。特徴的なものを抽出して27点を図化している。

1～8は廃棄土坑内より出土したものであり、9～26は鉄滓廃棄土坑を除く調査区内的鉄滓堆積層より出土したものである。27は工事立会時に表探したものであるが、立会の段階で鉄滓堆積層が既に露出していた点と、遺物そのものが特徴的であることから調査区の遺物に含めて掲載している。繩の羽口については調査区分のみを図化したが、鉄滓廃棄土坑からも出土している。



第25図 木場製鉄遺跡 鉄滓廻棄土坑の出土遺物 ($S=1/3$)



第26図 木場製鉄遺跡 調査区の出土遺物① (陶器) ($S=1/3$)

鉄津廢棄土坑の出土遺物（第25図）

1～4は陶器である。1は天目碗の体部から高台にかけての破片である。外面下位と高台部分は露胎となる。復元底径は約4.1cmを測る。2～4は鉢類の口縁であり、3については形態的特徴から播鉢となる可能性が高い。2は口縁が内湾して立ち上がり、端部外面が玉縁状に肥厚する。外面には白化粧土による波状の刷毛目が施される。3は口縁が直線的に開く。端部内面が幅広に肥厚しており段を形成する。口縁端部から釉が流しきかけられている。4は口縁が内湾気味に開き、端部が短く外反する。

5・6は磁器碗の高台から体部にかけての破片である。5は明るい緑色のガラス釉がかかり、貢入が入る。疊付、高台内部および内面見込み部分は露胎である。復元底径は約5.4cmを測る。6はやや大きめの碗であり、碗底部分が2cm近くの厚みをもった作りとなっている。高台は外面が斜めにカットされている。高台内および内面見込み部分は露胎となる。復元底径は約4.9cmを測る。

7・8は瓦質土器である。7は播鉢の口縁である。直線的に開き、端部が丸くおさめられている。内面の播目は2～3本単位で施されており、上端は引きっぱなしとなる。8は火鉢の口縁である。端部が肥厚しており、外面では段を形成している。口唇部は面取りされている。外面には菊花状の印文が施される。

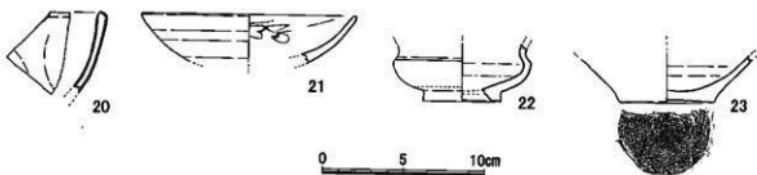
調査区の出土遺物（第26～28図）

9～19は陶器であり、9～12は陶器碗の体部から高台にかけての破片である。

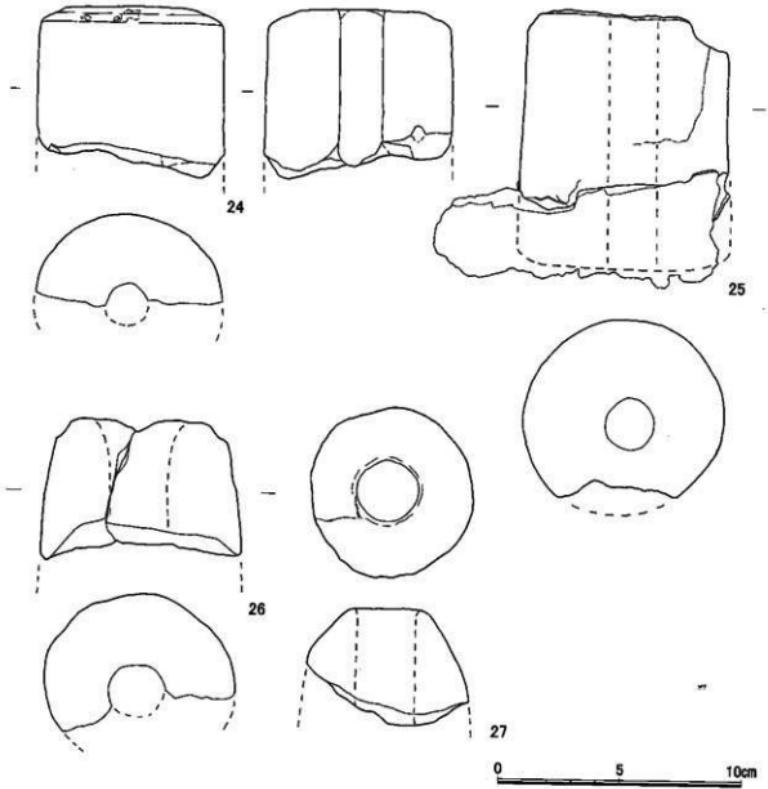
9は高台外面まで施釉されるもので、内面は全釉となる。体部外面の下位には段を有する。復元底径は約4.1cmを測る。10は外面の下位が露胎であり、内面は全釉となるものである。体部外面には焼成積みの際に付着したとみられる砂の痕がある。復元底径は約4.5cmを測る。

11・12はいずれも内面に蛇の目釉剥ぎがみられ、外面下位と高台内が露胎となるものである。底径は11が約4.6cm、12が約4.5cmを測る。13・14は碗または皿の高台である。焼成積みの手法として13には沙目、14には蛇の目釉剥ぎが用いられている。底径はそれぞれ約3.9cm、約4.5cmを測る。いずれも円盤状を呈する破片であり、破損品を成形して道具などに転用した可能性も考えられる。16～19は鉢類であり、16・17が口縁部、18・19が底部付近の破片である。また、そのうち18は播鉢である。16は口縁が内湾して立ち上がり、端部外面が玉縁状に肥厚する。端部付近は内外面ともに露胎となっており。外面には白化粧土による波状の刷毛目が施される。17は端折れの口縁となっており、内面に強い稜がつく。端部は上方へつまみ上げられる。内面に横線による文様がみられる。18は平底を呈しており、底部の器壁が分厚い造りとなっている。内面の播目は幅広の工具によって施されている。復元底径は約8.2cmを測る。19は高台の外面が斜めに大きくカットされている。内面は1～2本の横線によつて2cm弱の幅の圓錐区画が設けられている。中心からみて最初の区画には放射状の短線文様が施されており、1本または2本の直線と3～6本の波状短線が交互に描かれる。2段目の区画には花状の印文が施され、3段目の区画には再び放射状の線文がみられる。また文様内部には白化粧土が施されており、象嵌文様となっている。復元底径は約12.5cmを測る。

20～22は磁器である。20は龍泉窯系青磁碗の口縁部であり、わずかに外方へ開いている。外面に蓮弁文が施されるが、先端は曖昧となっている。21は皿の口縁部である。やや内湾気味に口縁が開くもので、復元口径は約13.1cmを測る。内面には花びら状の文様が描かれる。22は香炉である。脚を伴わ



第27図 木場製鉄遺跡 調査区の出土遺物②（磁器・土器）（S = 1 / 3）



第28図 木場製鉄遺跡 調査区の出土遺物③（石製品）（S = 1 / 2）

ず高台によって接地するタイプのものである。疊付は内側が少し浮いており、外縁によって接地する。内面は無釉であり、外面の下位と高台部が露胎である。23は土師器の杯である。底部より短く立ちあがり、大きく開く。底面はややへこみ、糸切り痕が残る。底径は約6.0cmを測る。

24～27は石製品であり、いずれも目の粗い砂岩を素材とした、輪の羽口である。24は端部が平坦にカットされているものである。直径は約7.8cm、管部の内径は約1.7cmを測る。25は端部に鉄滓が溶融している資料である。直径は約8.3cmであり、内径は約2.0cmである。26は端部が丸みを帯びるタイプのものである。直径は約7.6cmであり、内径は約2.3cmである。27は端部が先細りになるタイプのものである。内径は約2.4cmを測る。

出土した陶器の特徴を概観すると、肥前における陶器編年のⅢ期からⅣ期（1650～1750頃）のものが主体と言えるが、下限についてはⅤ期まで下るとみてよいかも知れない。今回の調査地から得られた情報による限りでは、17世紀後半頃に製鉄が本格的に開始され、18世紀代にも継続して操業されるという状況が窺える。20の龍泉窯系青磁といった中世に属する遺物があるが量的に希薄であり、伝世品の可能性も踏まえ、操業開始期と簡単に結びつけることは難しいのかも知れない。

〈参考文献〉

- 大橋康二 1994 「古伊万里の文様」理工学社
九州近世陶磁学会 編 2000 『九州陶磁の編年』
原田範昭 編 2004 『古町遺跡I』古町遺跡第1次調査区発掘調査報告書 熊本市教育委員会

表7 木場製鉄遺跡出土遺物観察表（陶磁器・土器）

図	番号	出土	種別	骨董	生産地	部形・文様等における特徴		備考
25	1	高台土坑内	陶器	瓶	肥前系	天目鏡 外葉下位および高台内落胎 肥元底径4.1cm		
	2	高台土坑内	陶器	鉢	肥前系	口縁端部玉縁状に肥厚、外側に白化粧土による波状の網目		
	3	高台土坑内	陶器	鉢	肥前系	口縁部のみ施釉、器底内面が褐色に肥厚		
	4	高台土坑内	陶器	鉢	肥前系	口縁部を外方にへり付け		
	5	高台土坑内	陶器	瓶	肥前系	明るい緑色のガラス釉、臺付・高台内・内面見込みは墨跡 肥元底径5.4cm		
	6	高台土坑内	陶器	瓶	肥前系	高台外側を削りにカット、高台内・内面見込みは墨跡 肥元底径4.9cm		
	7	高台土坑内	瓦質土器	埴輪	肥前系	腰は2~3寸で単位をなす 上層は引まっぱなし		
	8	高台土坑内	瓦質土器	火鉢	肥前系	外側に花状の印文		
26	9	調査区	陶器	瓶	肥前系	天目鏡 外葉下位および高台内落胎 肥元底径4.3cm		
	10	調査区	陶器	瓶	肥前系	外側および高台内落胎 外側に移付窓 肥元底径4.5cm		
	11	調査区	陶器	瓶	肥前系	黒褐色の釉、外葉下位および高台内は墨跡、瓶の口部剥離、底径4.6cm		
	12	調査区	陶器	瓶	肥前系	黒褐色の釉、外葉下位および高台内は墨跡 瓶の口部剥離、底径4.5cm		
	13	調査区	陶器	瓶又は壺	肥前系	円錐状の底脚付、瓶の口部内側に移付3箇、底径3.9cm	軽用品小	
	14	調査区	陶器	瓶又は壺	肥前系	内壁状の底脚付、内側に蛇の目模様、底径4.5cm	軽用品小	
27	15	調査区	陶器	瓶	肥前系	口縁端部外側が玉縁状に肥厚		
	16	調査区	陶器	瓶	肥前系	口縁端部外側が玉縁状に肥厚		
	17	調査区	陶器	瓶	肥前系	口縁端部外側が玉縁状に肥厚、白化粧土による波状の網目		
	18	調査区	陶器	埴輪	肥前系	口縁端部外側に内面に鉛鉛文		
	19	調査区	陶器	瓶	肥前系	平底、幅広工具による縦目 肥元底径5.2cm		
	20	調査区	埴器	瓶	中窓	高台外側を削りにカット、内側に圓錐形窓、区内に鉛鉛状の縦線文および花状の印文で差別施釉で窓く、窓元底径1.5cm	衛生廐所	
28	21	調査区	埴器	瓶	肥前系?	内側に花びら状の文様、肥元口径13.1cm		
	22	調査区	埴器	香炉	肥前系	内面無釉、外葉下位および高台内落胎 肥元底径4.8cm		
	23	調査区	土器	杯	在地	底部手切り 底径5.3cm		

表8 木場製鉄遺跡出土遺物観察表（石製品）

図	番号	出土地区・部位	器種	石材	測量			備考
					長さ(cm)	直径(cm)	内径(cm)	
28	24	調査区	繩の羽口	細い砂岩	6.7	7.8	1.7	227.0 塵封平坦
	25	調査区	繩の羽口	細い砂岩	10.4	8.3	2.0	770.5 鉄溶付着
	26	調査区	繩の羽口	細い砂岩	5.2	7.8	2.3	239.5
	27	工事立会時表記	繩の羽口	細い砂岩	4.8	不明	2.4	109.5 塵封先端

第4章 調査のまとめ

三本松遺跡においては、縄文時代晚期後半および弥生時代中～後期頃を主とした遺物が包含層を中心出土した。第1章でも触れたが、布津から西有家付近には台地状の地形が連続的に展開しており、縄文時代および弥生時代の遺跡が密集する一帯となっている。三本松遺跡はこうした一帯のおよそ北辺に位置しており、遺跡形成に適した環境であったことから、断続的に集落が形成されていたものと考えられる。近年の開発事業に伴う調査でこれと同時期あるいは前後する時期の資料が増加しており、これらの整理作業を進め、また既存資料も併せて比較検討することで地域内の遺跡の変遷や生業形態をより明らかにできるものと考えられる。そうした点からも貴重な資料を追加することができた。縄文時代晚期の土器は、黒川式段階のものが主をなす。地域として、後続する刻目突帯文期の遺跡の調査は蓄積されつつあり、今回の調査も参考として、遺跡が時間を追ってどのように移動したかについて、今後より注意を払いたい。弥生土器については、いわゆる肥後の形態のものがみられるが、地理的に近いこともあり、密接な影響を受けていると考えられる。ただ他地域の資料との類似性を指摘するのみでなく、在地性をより明確化しなければならない点は大きな課題としてあり、今後取り組む必要があるであろう。

木場製鉄遺跡は、地元で「かなやま」と呼ばれている場所にあり、「布津町郷土史」においても明治時代まで製鉄が行われていたことが指摘されていた。開発工事に伴う形ではあったが、その一端を窺い知るに至り、出土した陶器の年代から操業時期は少なくとも17世紀後半まで遡ることを確認した。遺跡のすぐ南西側には渡瀬川が流れおり、水や原料の砂鉄を必要とする製鉄にとって、効率のよい土地を選定していると理解できる。また「木場」という地名が示すように、燃料の調達にも事欠かなかったのかも知れない。製鉄遺跡ではありながら、鉄滓等の廃棄が行われた個所の部分的な調査であり、生産技術の様相などを知るには至らなかった。ただ、17世紀後半という年代に、製鉄の操業が開始されていたという事実にひとまず注目しておきたい。調査を行った布津地区を含め、概ね現在の南島原市と重複する島原半島東南部は、寛永十四年（1637）から翌年にかけて起こった「島原・天草一揆」によって壊滅に近い打撃を受け、荒廃状態に陥る。そうした状況からさほど時期を置かずには製鉄産業が営まれ始めていたという点は、当時の復興の様子を窺う意味でも重要な情報であり、貴重な発見であったと言えよう。

いずれの調査も土地改良事業に伴い発生した緊急のものであった。木場製鉄遺跡を発見した個所については、工事の際に立会が必要であることをもともと把握していたが、三本松遺跡を調査するに至った経過については担当課への情報伝達が遅れたこともあり、難しい対応を迫られることとなった。調査担当者の力量の問題も大きいが、粗っぽい調査となってしまった感は否めない。開発関係部局と文化財保護部局の相互の連絡を密として、改善を図っていく必要があるだろう。ただ、何れの調査においても工事計画の一部見直しを含め、遺跡の現況保存に最大限の配慮を頂いたことは何よりも良かった。またそれにより、調査面積を最小限度に抑えることができた点が、辛うじて現地調査を工期に間に合う形で終える事ができた要因であったろうと考えている。島原振興局をはじめ、調査地における施工業者、地権者など関係者の方々に、あらためて深く感謝を申し上げたい。

本書に掲載した個々の資料に対して、調査担当の力量が及ばず十分な検討と評価を加えるには至っ

ていない。また作業期間の兼ね合いから、掲載を割愛せざるを得ない資料もあった。これらについては、別の機会を得て紹介できればと考えております、今後の責としたい。

〈参考文献〉

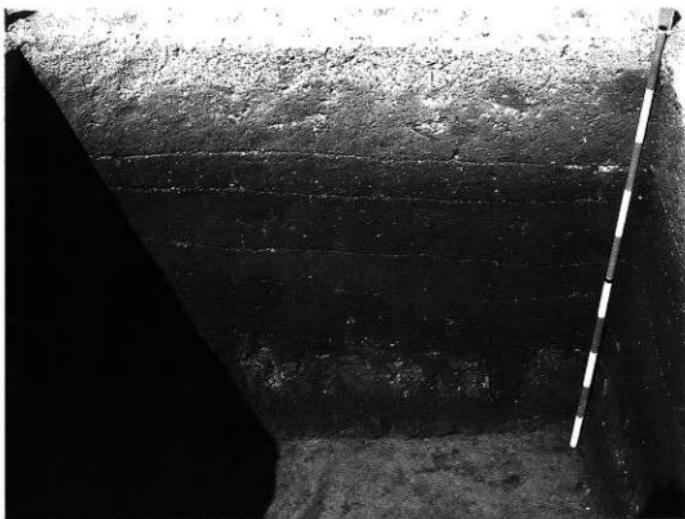
布津町・1998 『布津町郷土誌』

写 真 図 版

図版1 三本松遺跡



調査前風景（範囲確認調査）



土層堆積状況（範囲確認調査）

図版2 三本松遺跡

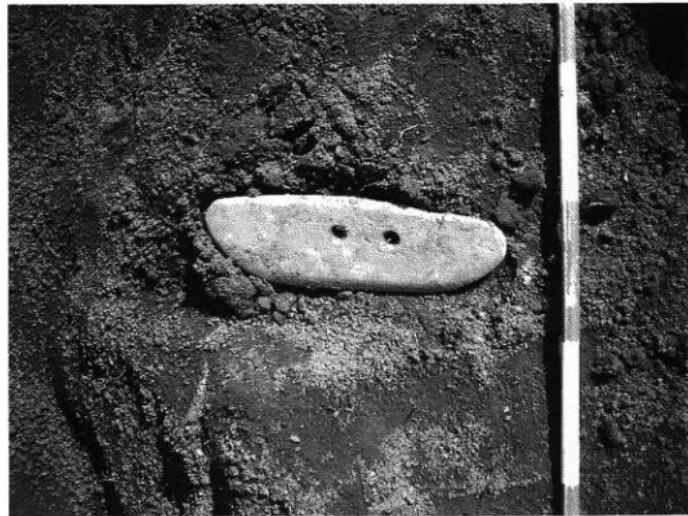


表土剥ぎ取り状況



作業風景

図版3 三本松遺跡



遺物出土状況

図版4 三本松遺跡



1区完掘状況（北より）

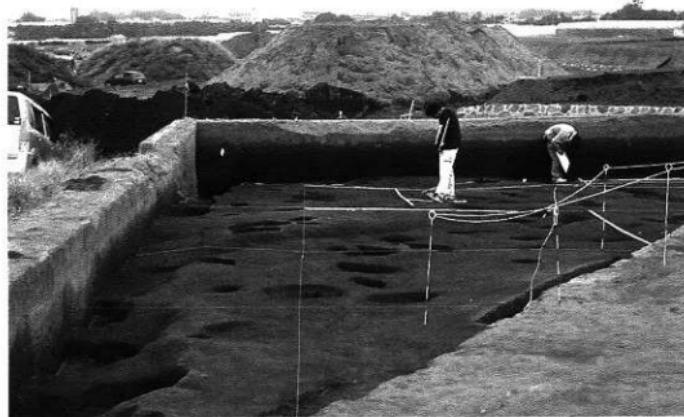


2区完掘状況（西より）

図版 5 三本松遺跡



2区発掘状況（南より）



測量作業

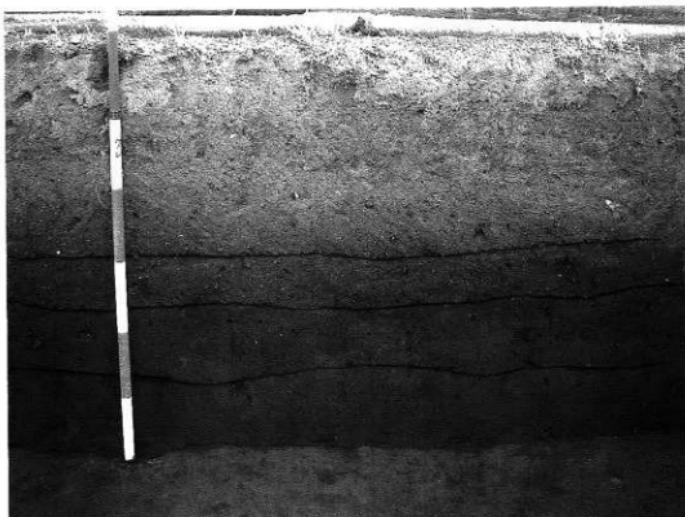
図版 6 三本松遺跡



1区完掘状況（上空より）



2区完掘状況（上空より）

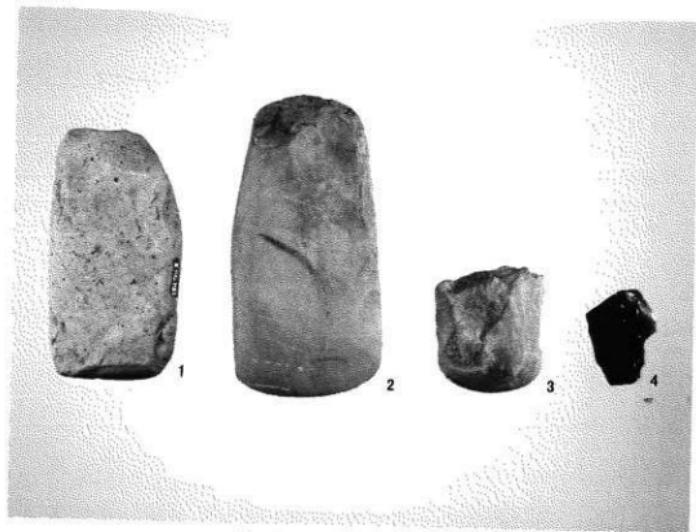
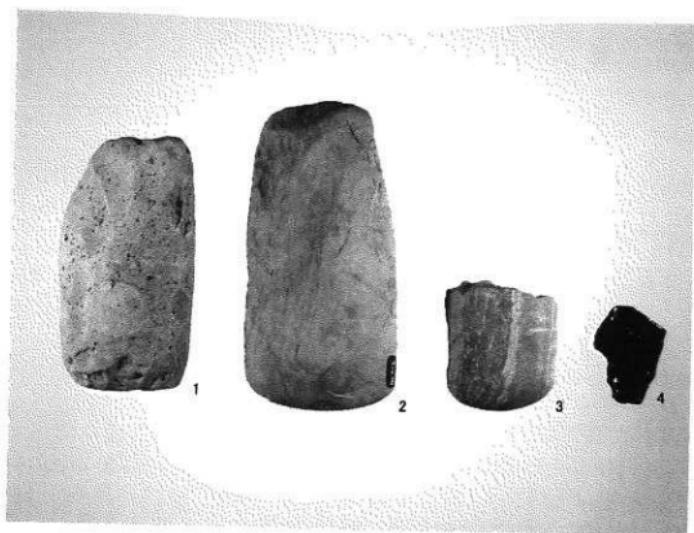


1区土層堆積狀況



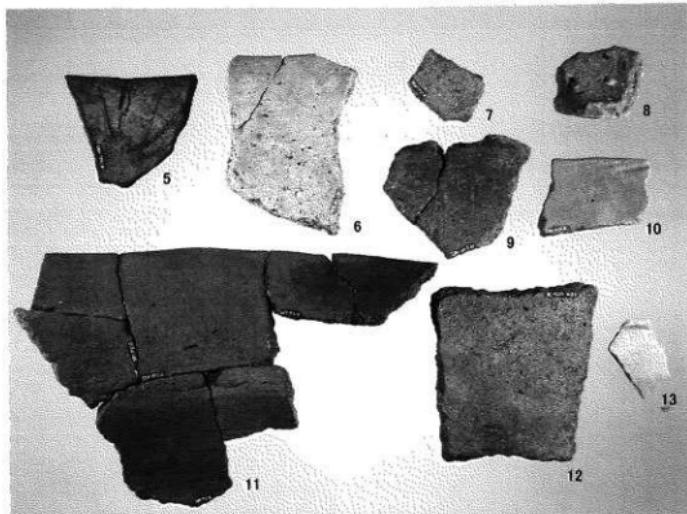
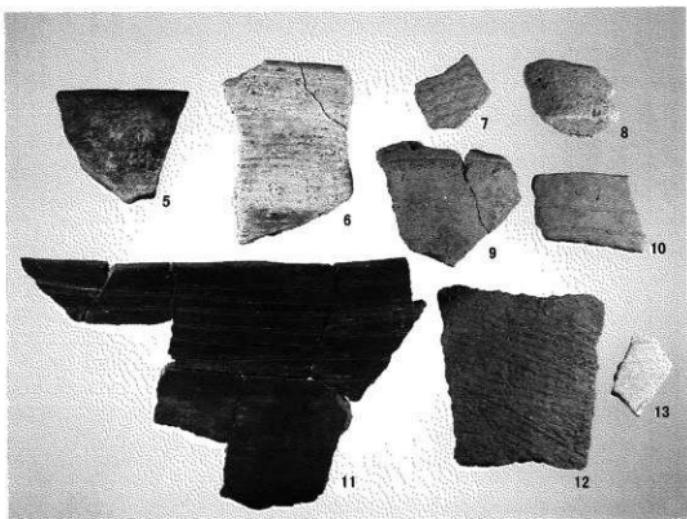
2区土層堆積狀況

図版8 三本松遺跡



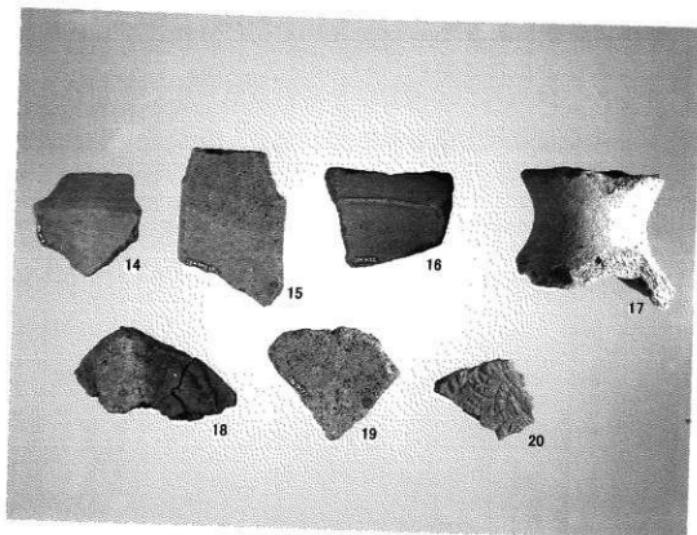
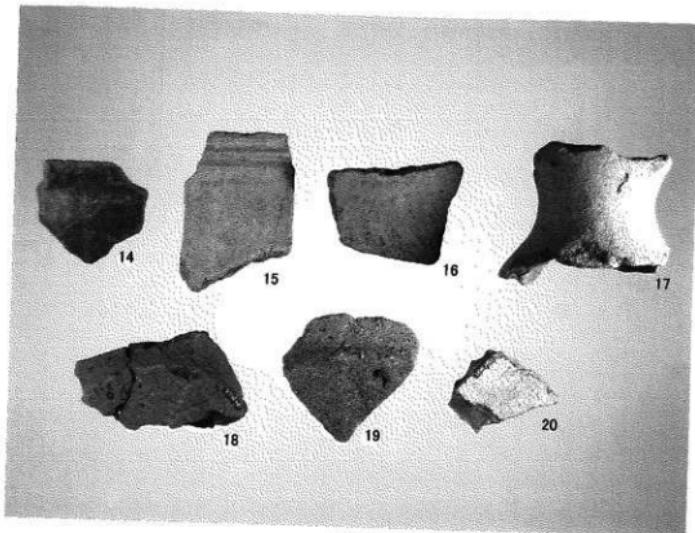
範囲確認調査の出土遺物（石器）

図版9 三本松遺跡



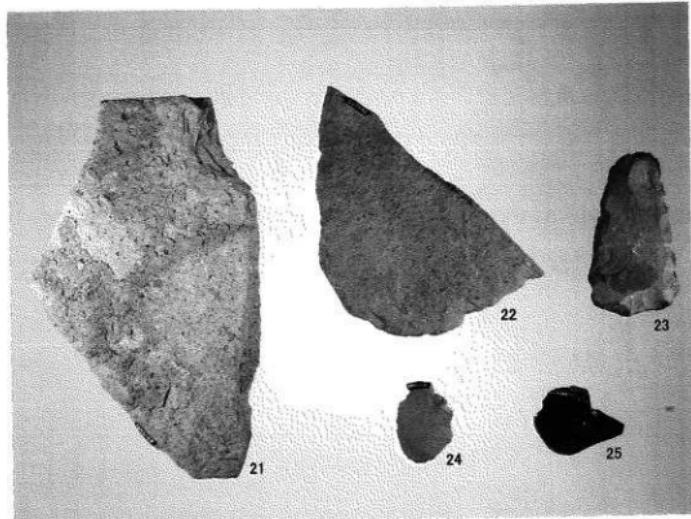
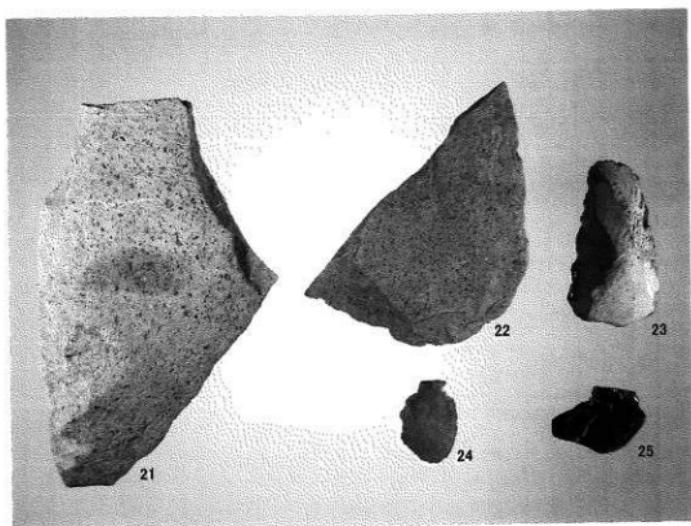
範囲確認調査の出土遺物（縄文土器）

図版10 三本松遺跡



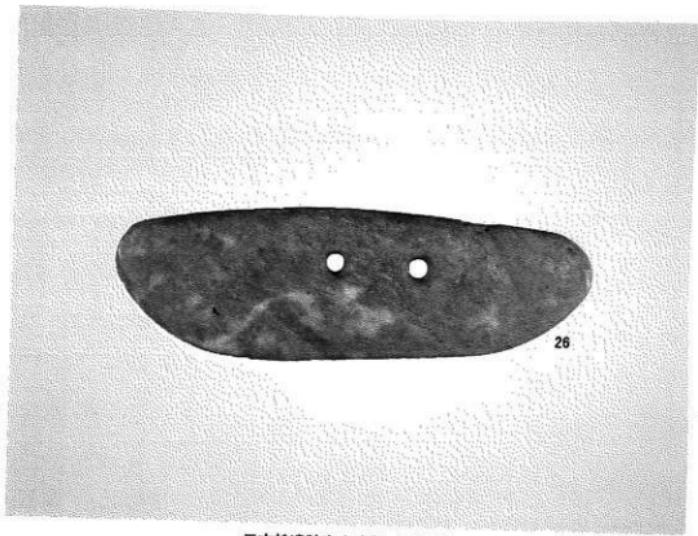
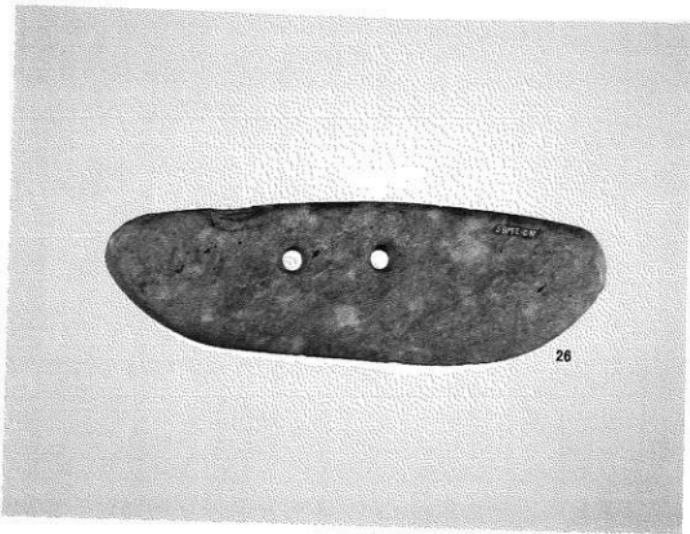
範囲確認調査の出土遺物（弥生時代以降の土器類）

図版11 三本松遺跡



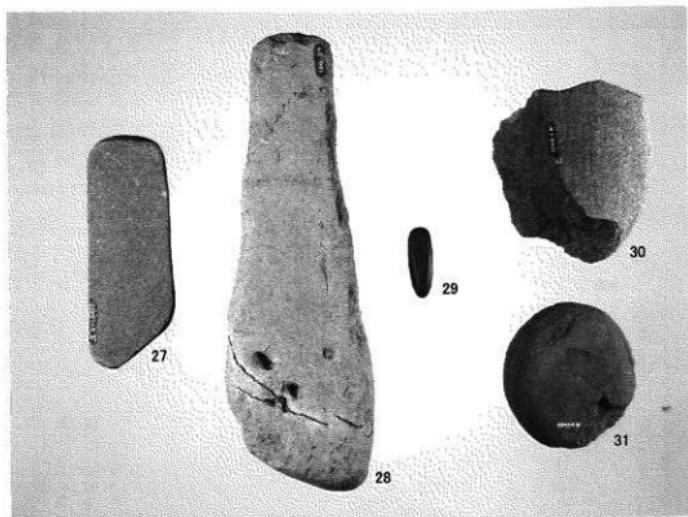
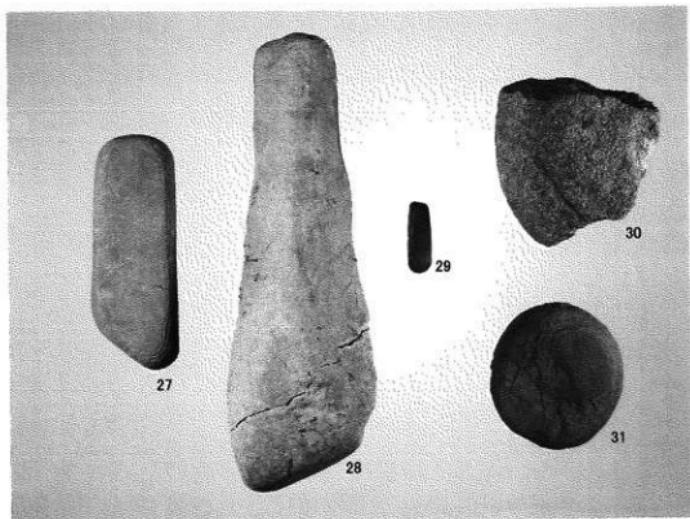
三本松遺跡出土遺物 石器①

图版12 三本松遺跡



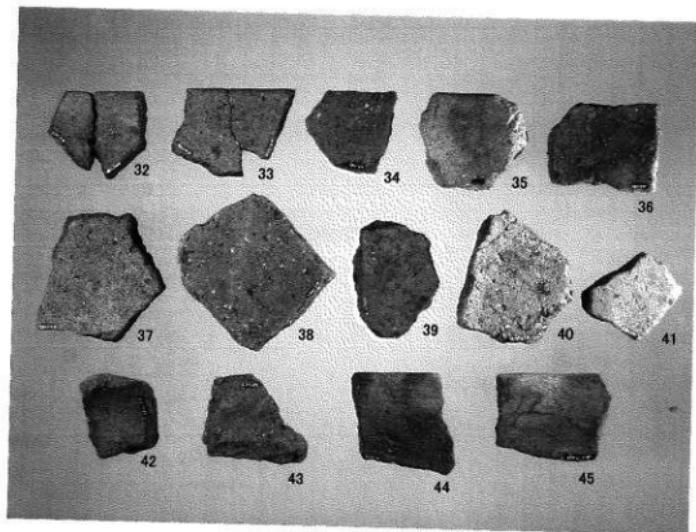
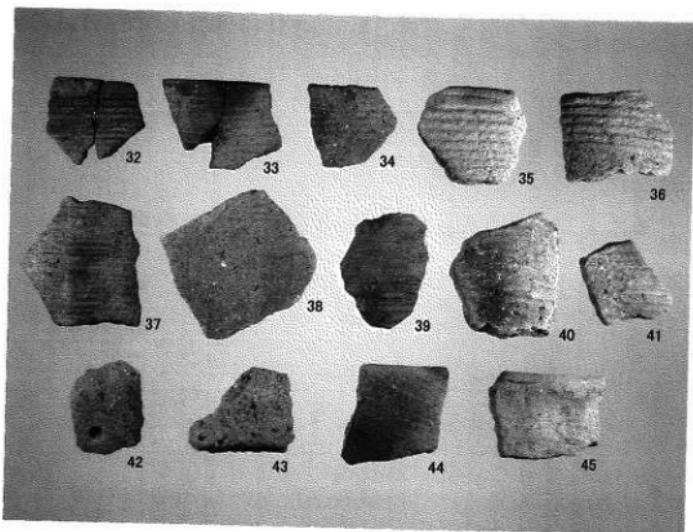
三本松遺跡出土遺物 石器②

図版13 三本松遺跡



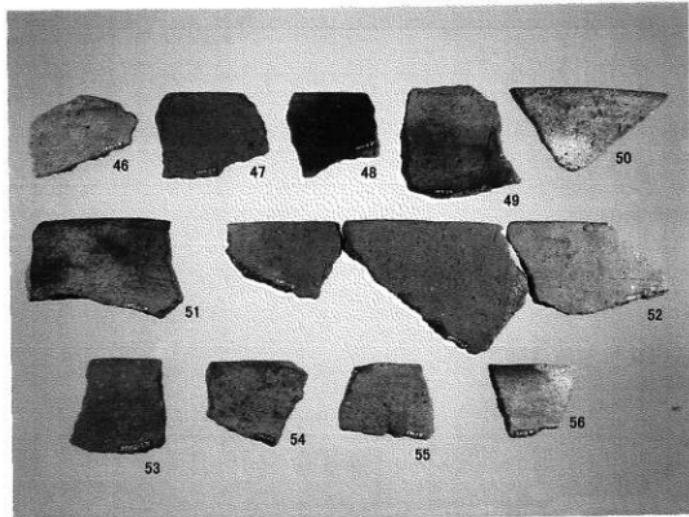
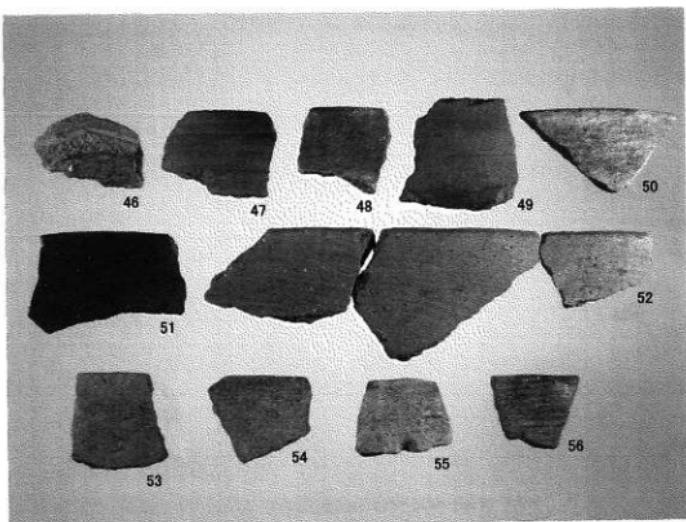
三本松遺跡出土遺物 石器③

図版14 三本松遺跡



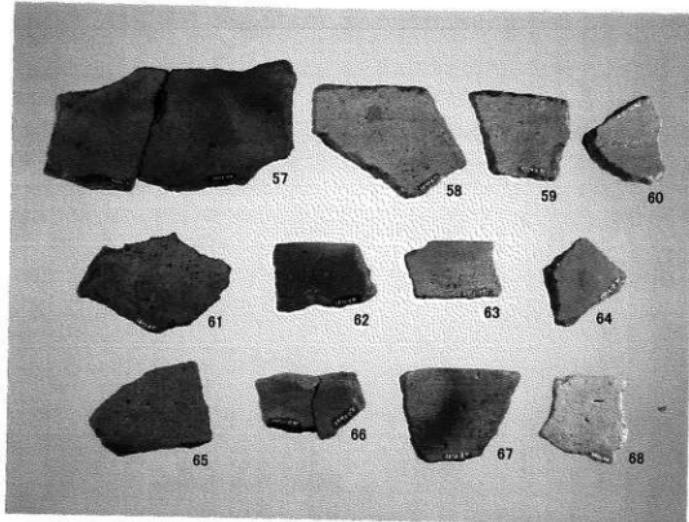
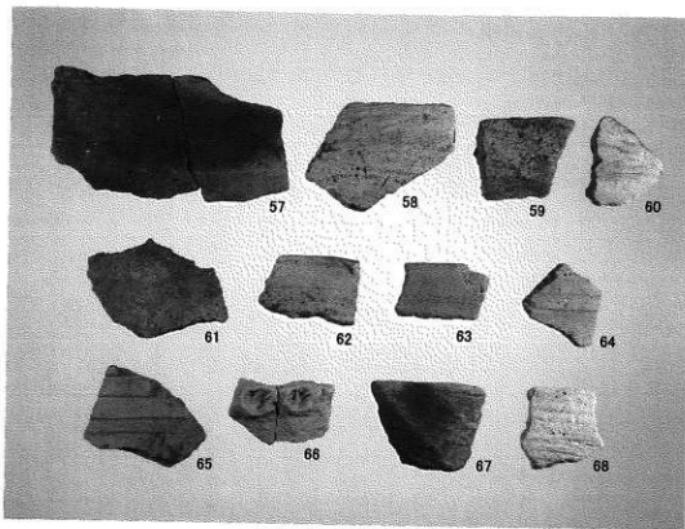
三本松遺跡出土遺物 縄文時代早期の土器

図版15 三本松遺跡



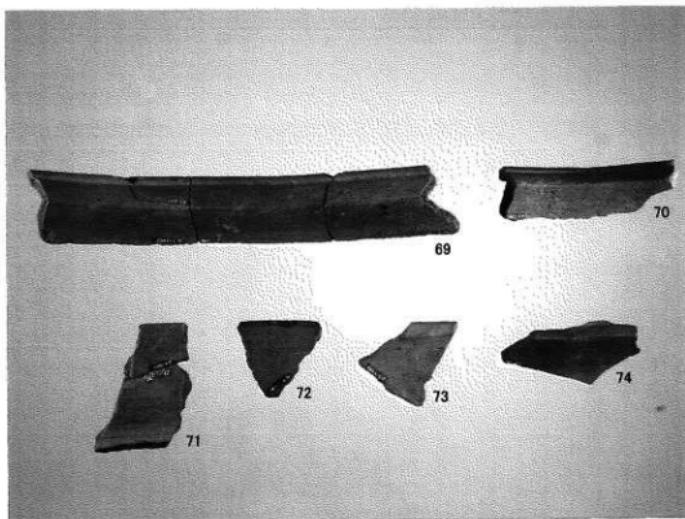
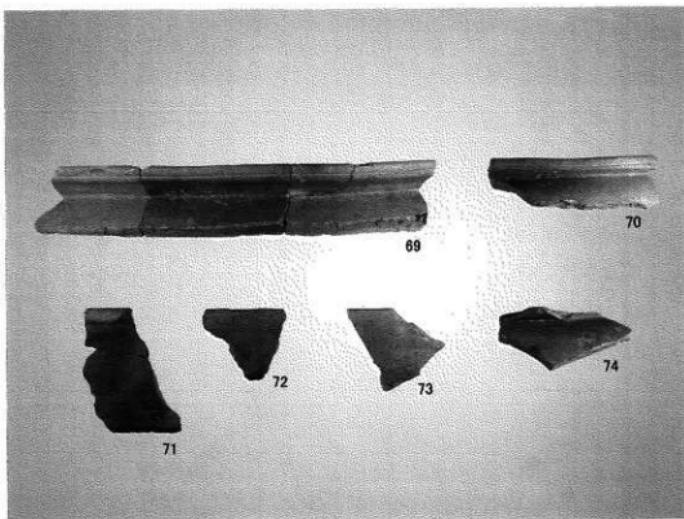
三本松遺跡出土遺物 縄文時代後晩期の土器（深鉢）①

図版16 三本松遺跡



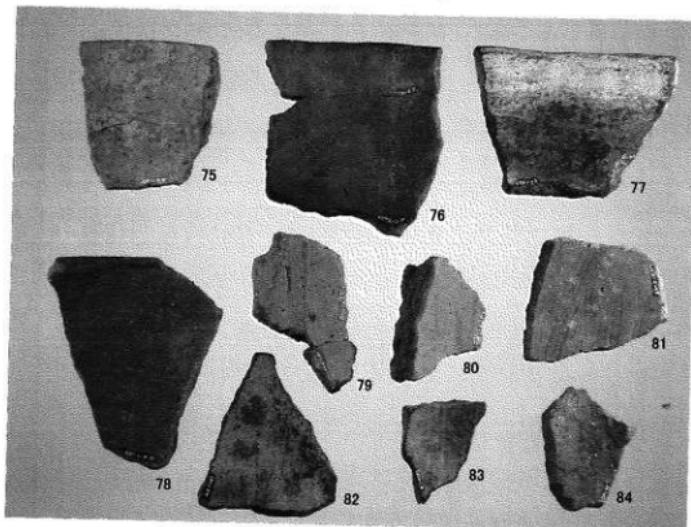
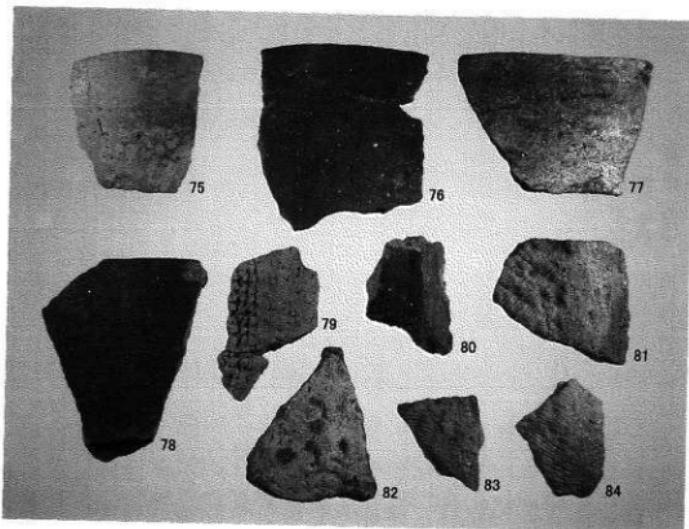
三本松遺跡出土遺物 縄文時代後晩期の土器（深鉢）②

図版17 三本松遺跡



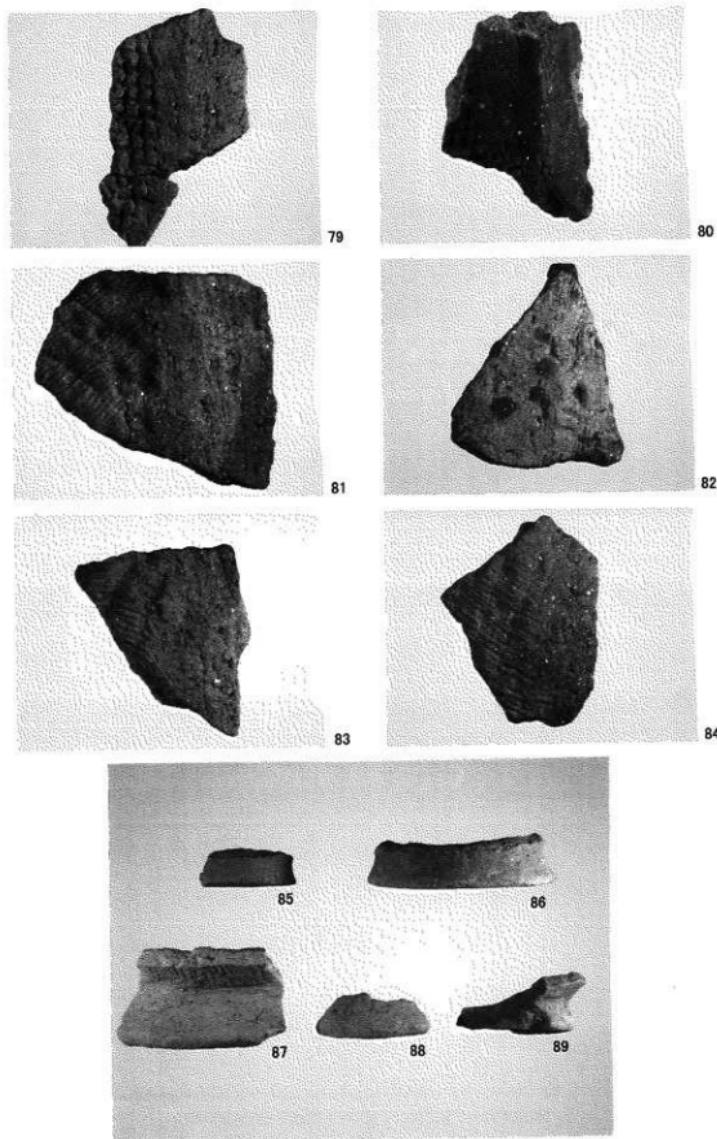
三本松遺跡出土遺物 織文時代晩期の土器（精製浅鉢）

図版18 三本松遺跡



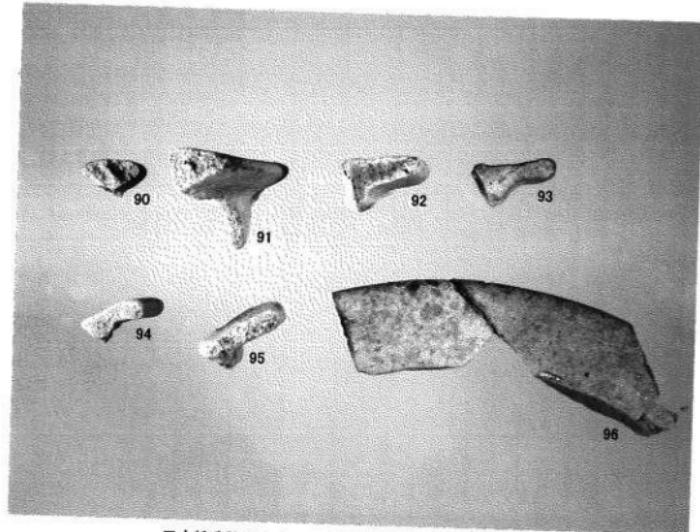
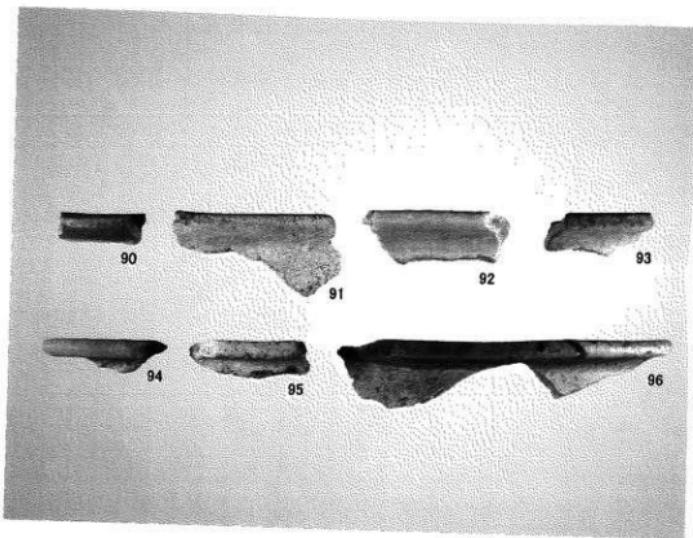
三本松遺跡出土遺物 繩文時代晚期の土器（粗製浅鉢）

図版19 三本松遺跡



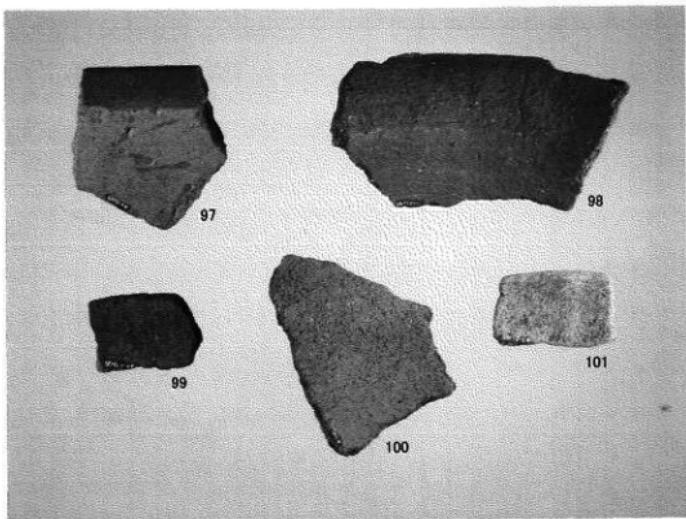
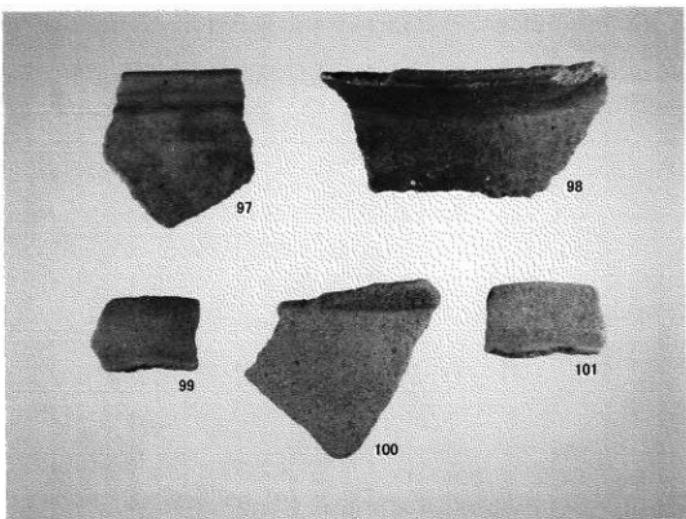
三本松遺跡出土遺物 組織痕土器（拡大）・縄文時代晩期の土器（底部）

図版20 三本松遺跡



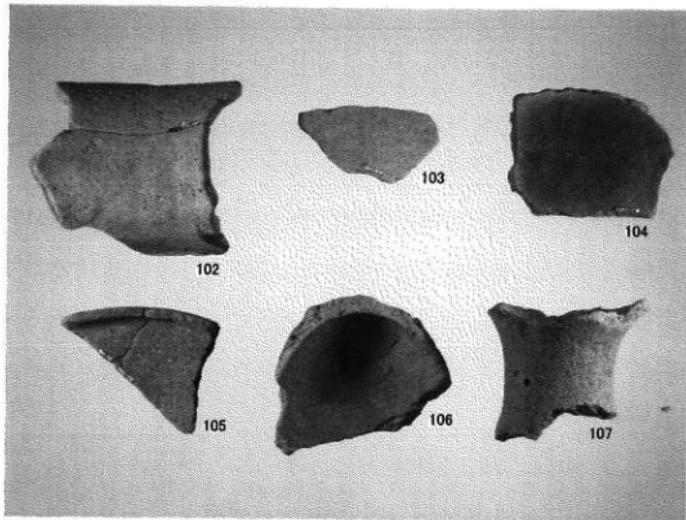
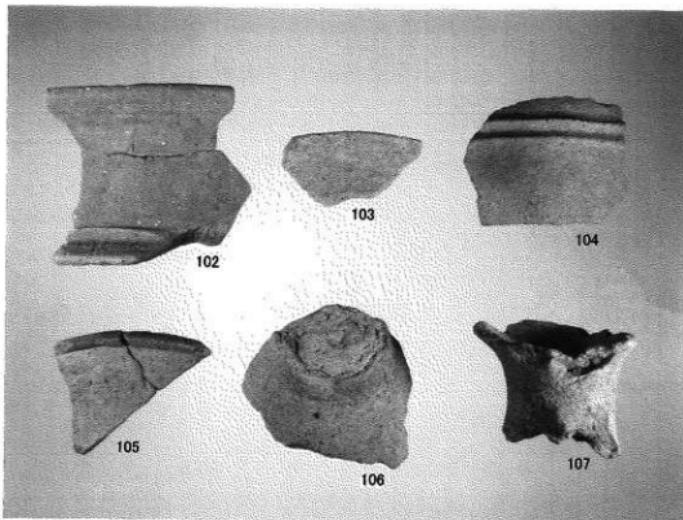
三本松遺跡出土遺物 弥生時代の土器①（中期の期）

図版21 三本松遺跡

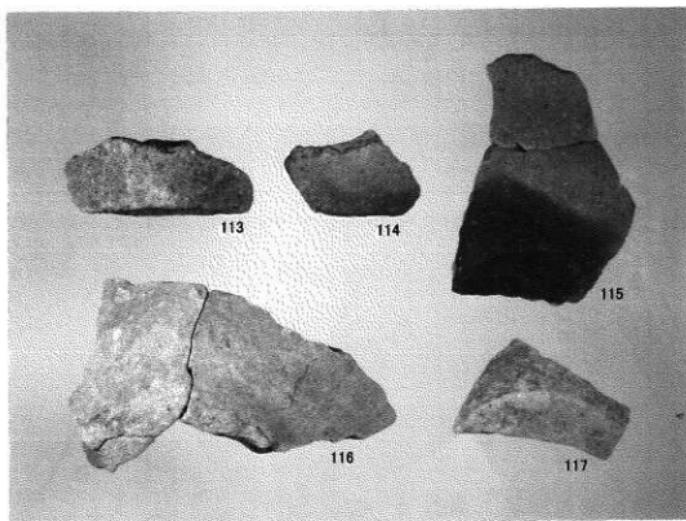
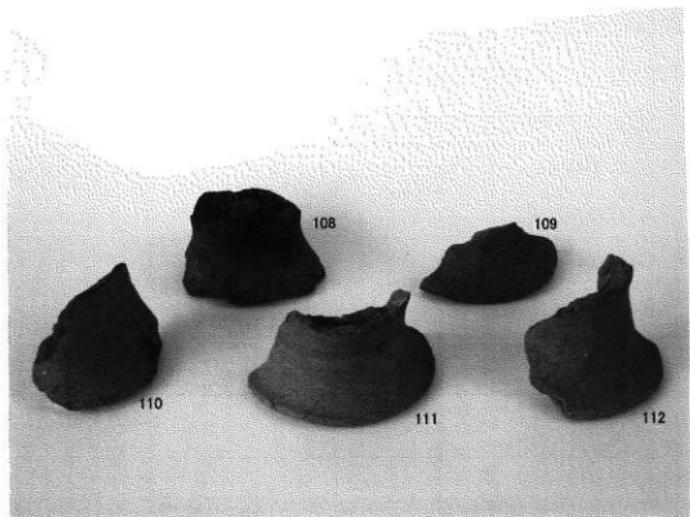


三本松遺跡出土遺物 弥生時代の土器②（後期の甕）

図版22 三本松遺跡

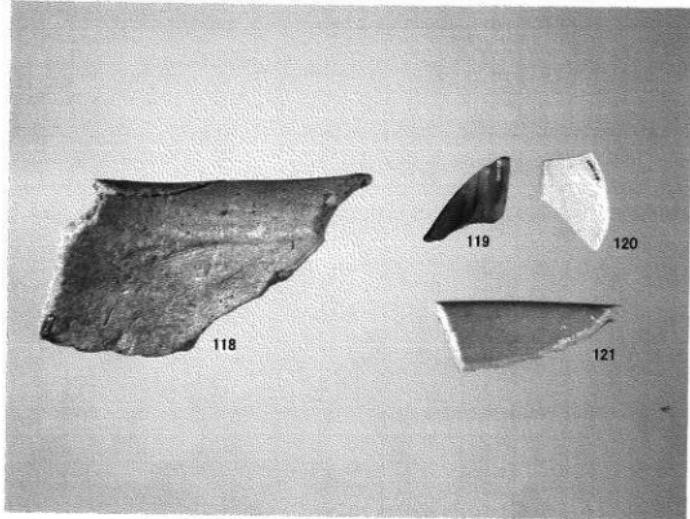
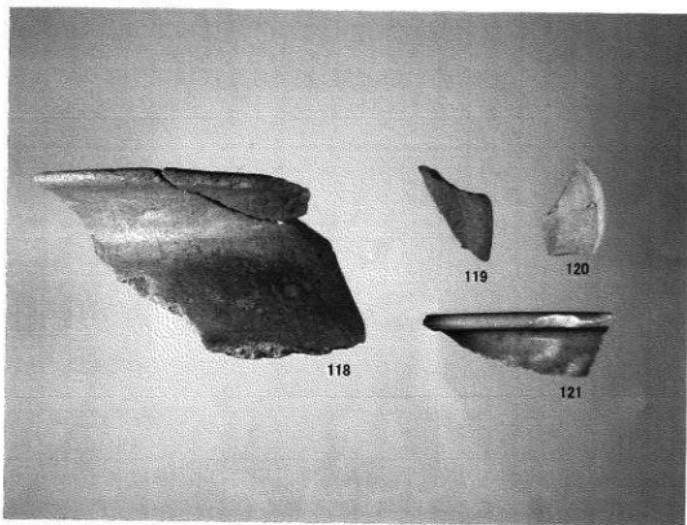


三本松遺跡出土遺物 弥生時代の土器③（壺・高坏）



三本松遺跡出土遺物 弥生時代の土器④（脚部・底部）

図版24 三本松遺跡



三本松遺跡出土遺物 古墳時代以降の遺物

図版25 木場製鉄遺跡



調査前風景

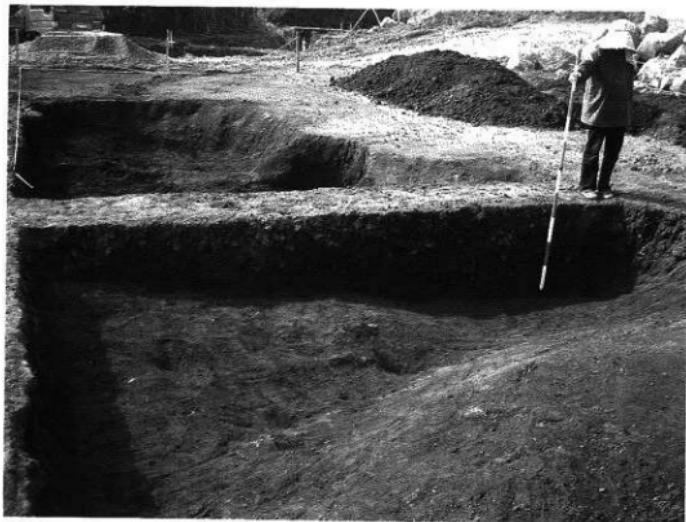


調査区精査による鉄滓分布の確認状況

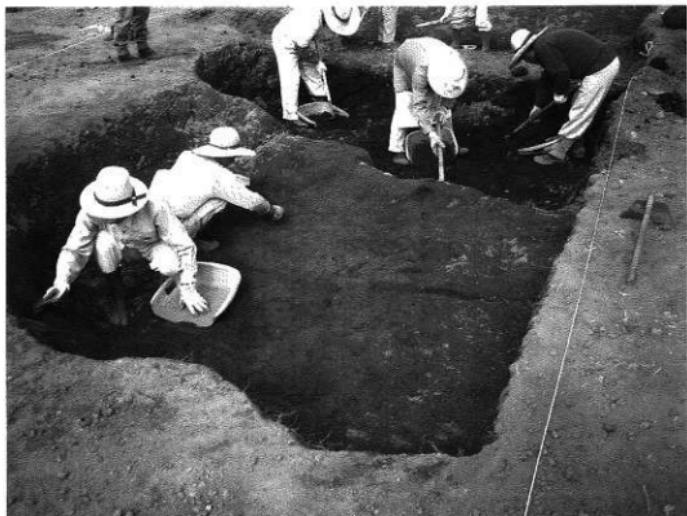
図版26 木場製鉄遺跡



作業風景



調査区中央付近の鉄滓堆積状況



作業風景



調査区実掘状況（北より）

図版28 木場製鉄遺跡

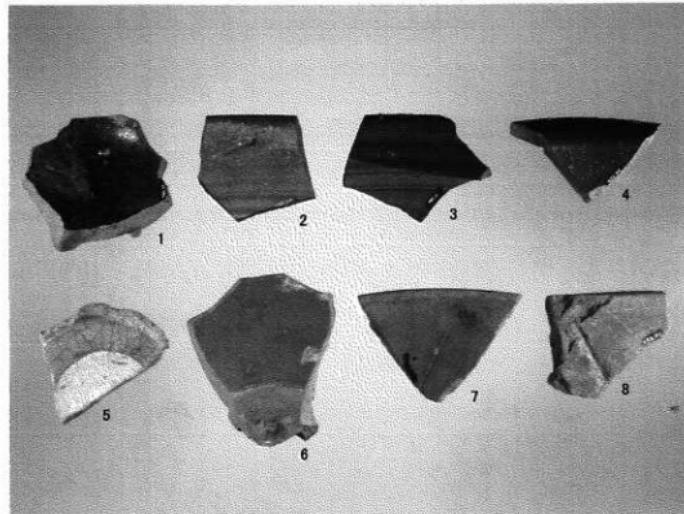
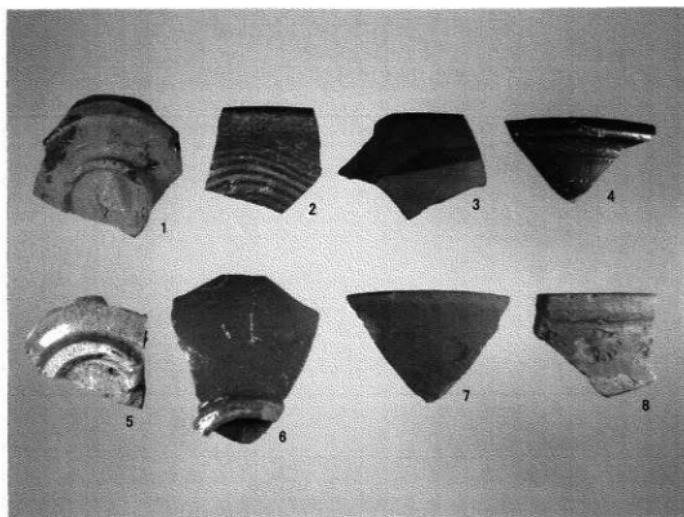


鉄滓廃棄土坑（西より）



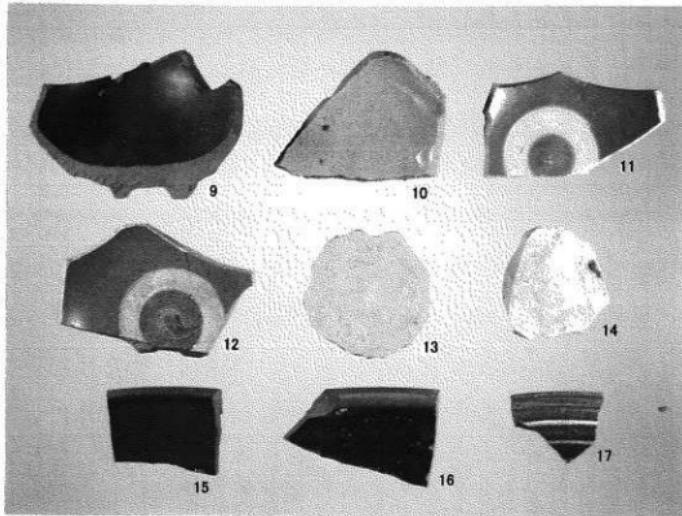
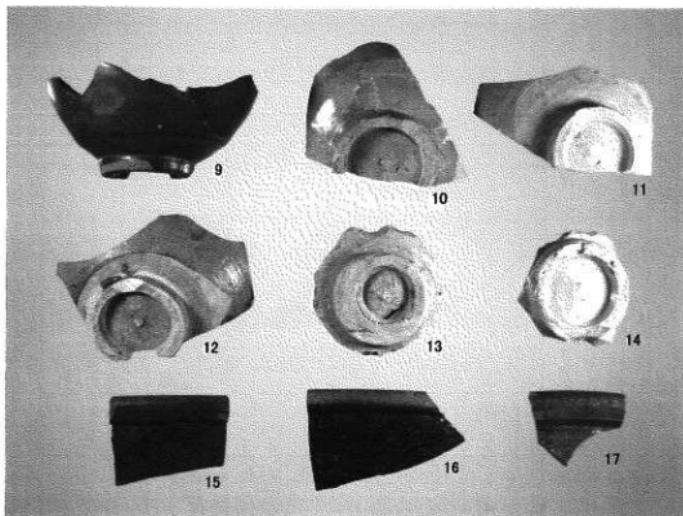
鉄滓廃棄土坑（東より）

図版29 木場製鉄遺跡



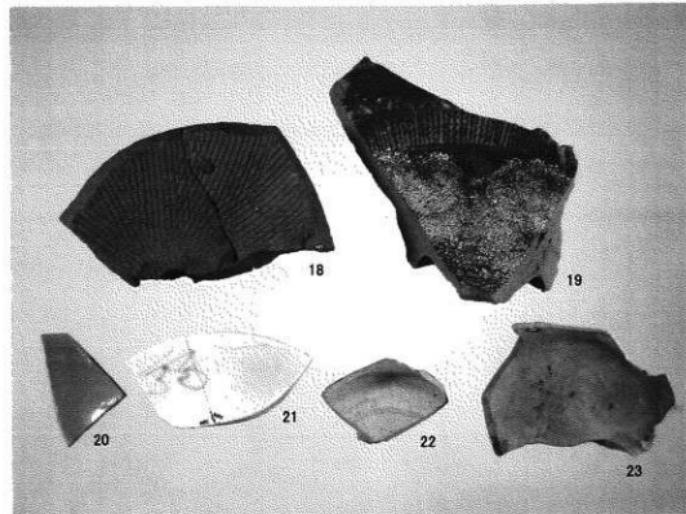
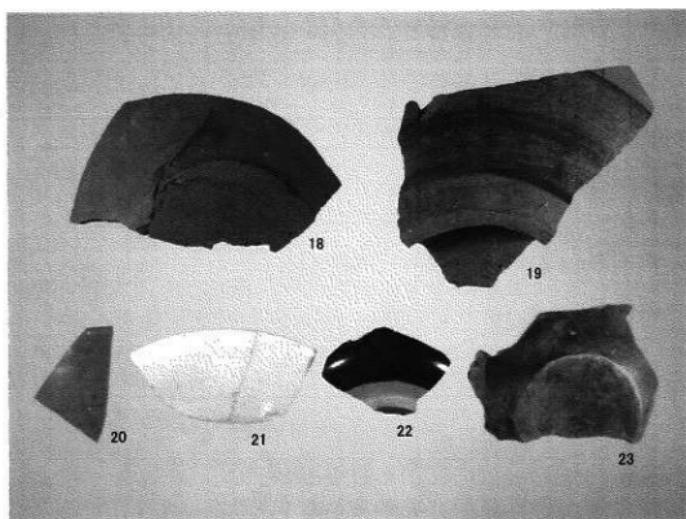
木場製鉄遺跡 鉄滓廃棄土坑内の出土遺物

図版30 木場製鉄遺跡



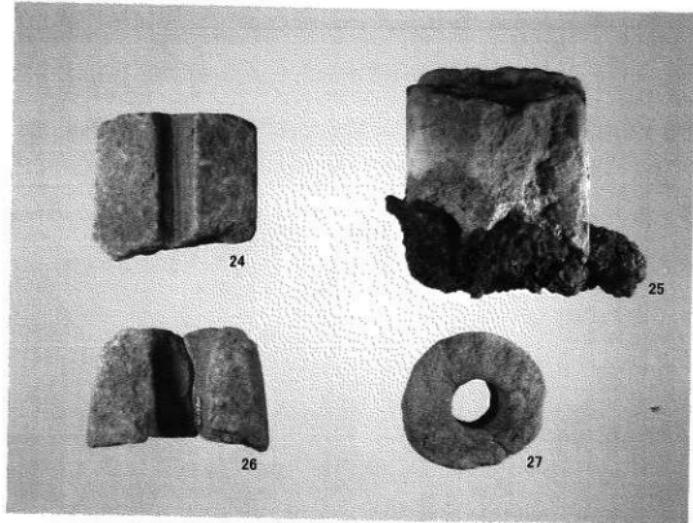
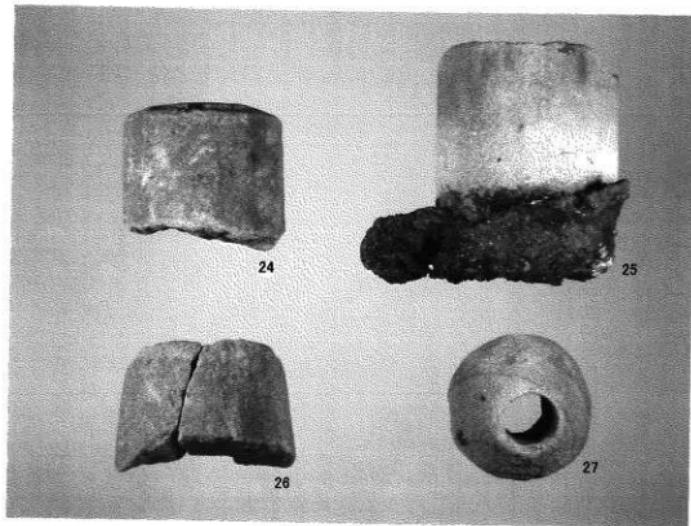
木場製鉄遺跡 調査区の出土遺物① (陶器)

図版31 木場製鉄遺跡



木場製鉄遺跡 調査区の出土遺物② (陶磁器・土器)

図版32 木場製鉄遺跡



木場製鉄遺跡 調査区の出土遺物③ (石製品・鶴の羽口)

報告書抄録

ふりがな	さんほんまついせき・こばせいてついせき							
書名	三本松遺跡・木場製鉄遺跡							
副書名	布津東部地区県営畠地帯総合整備事業に伴う調査							
卷次								
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第2集							
編著者名	伊藤 健司							
編集機関	南島原市教育委員会							
所在地	〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地							
発行年月日	西暦2010年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
三本松遺跡	長崎県南島原市布津町内561番地 1ほか	42214	96-57	32° 41' 30"	130° 21' 14"	191004 ~ 191109	300m ²	圃場整備
木場製鉄遺跡	長崎県南島原市布津町内442番地 2		96-99	32° 41' 54"	130° 19' 44"	191113 ~ 191117	100m ²	圃場整備
集録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三本松遺跡	遺物包含地	縄文時代 弥生時代	柱穴 溝状造構	縄文土器 弥生土器 石器				
木場製鉄遺跡	製鉄跡	近世	鉄滓廃棄土坑	陶磁器 轆の羽口 鉄滓				

南島原市文化財調査報告書 第2集

**三本松遺跡
木場製鉄遺跡**

—布津東部地区県営畠地帯総合整備事業に伴う調査—

平成22年3月26日

発行 長崎県南島原市教育委員会

〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷 謙早印刷株式会社